忠義墳盟約大石

忠義墳盟約大石　拾壹冊

壹冊目

詞陶犬瓦鷄も妙手によらば。奚聲を發せざらん。家を守り朝を告。其功人に於るをや。四海に響く萬物の靈場重き。鎗倉御所。居ながら政事の道しるき。地足利の箕裘たる尊氏の御弟直義公。兄の政務を助け評諚の間へ出給へば。連署の席には桃井若狹之助禮服正し袖長き。優美に似付ぬ高の佐平太。親の權威を讓りの大紋。烏帽子引立肩いからし。欲と惡事を阿仲間。藥師寺治郎左衞門迄。末座の諸侯嚴重に威義を。フシ正して伺公有。地直義仰出さるるは。詞往時元弘建武の比より。許多の勇士の討死算ふるに遑あらず。就中去八月。吉野の宮にて崩御の先帝。後醍醐の天皇の追福を修せんには。洛西嵯峨に精舍を營。天龍資聖と號よと。夢窓國師の勸に隨ひ。程遠き都へ下知し。詞圖を引せ礎石を運ばせ。棟を登さん支度の刻。破風の懸魚へ打せる金鷄。地俗には金の鷄迚。雌雄番ひし古器の名物。詞流支三藏の將來にて。今日域に止るよし。地旁知らずや聞ずやと。御諚にはつと若狹之助。先達て金の鷄お尋あらんと存ぜし故。諸家の記錄を預つたる師直殿へ。孰の家の持傳へぞ。吟味有と言置しと。地聞も敢ず差出る佐平太。詞イヤ桃井殿。其許の差圖を受る親共ではなけれ共。此比不快なるにより。拙者が代て記錄を披見し存じ居る金の鷄。雄鳥は去年殿中を騷がして。切腹仰付られし。鹽冶判官が持傳へと有し故。鹽冶に緣ある壹岐の城主石堂右馬頭弭秋を招かせしに。使は如何と尋に藥師寺。詞成程先刻御召と言遣しが。程もあらじと取り〳〵評議の其所へ。弓馬の聞へ覺の家柄。召に乘じて右馬頭。素袍の袖も長袴。大廊下にフシ膝行あれば。大將御氣色麗しく。早速の出仕神妙〳〵。今度尋る金鷄の雄鳥。先達て改易せし鹽冶が家に所持せし由。內緣ある弭秋より。有家を求め出

されなば。地滿足ならんと仰の内。石堂は頭を傾け。詞ハ、ア委細承知仕る。世に聞へたる金の鶏。同苗が傳持し
と聞ながら。未だ茅閲せざれば。幸手前へ招き置。かほよの前に委細を尋。時日を移さず。金鶏の雄鳥を献じ奉
らん。又雌鳥は難波に名高き町人淀屋辰五郎方に所持せしと承る。幸御爲替御用に付。此程當地へ召れし淀屋。御
廣敷に相詰居れば。御前へ呼出し申さんやと。地聞し召れて。猶豫もなく。それ〳〵と御諚の下。頓て彼處へ告知す。
地御召と聞て多さへも。汗汲流す淀屋の主。町家に其名辰五郎。袴の襞積は薄けれど。厚き分限の肩衣を。フシ白洲
に平伏畏る。地廣縁先より石堂弭秋。詞鹽冶の家と汝が方に持傳へたる金の鶏。此度武將の御望なれば。地時日移
さず差上べしと。詞に猶も恐入。詞ハ、我々風情が所持の器物冥加に叶ひし御上の御所望。併彼の金鶏雌雄合體する
時は自己と時を作るといふ。奇特ある重寶なれば。藏の内の鎮守に納め。家の守りと是迄拜せし事なければ。急ぎ御
暇給りて御動座の祭りをなし。地迫日差上奉らんと。遁難波に隱れなき。辯舌よどまぬ淀川の。フシ水に育し器
量なり。地右馬頭謹んで。詞御聞に達する通りなれば。不日に揃ふ雌雄の鶏。御賢慮安くと言上す。佐平太片頬に苦
笑ひ。詞ハ、、、、戰國の砌なるに。弭秋殿には骨折ず武勇智謀も入ぬ嚴命。蒙られたも御前體。付つ添つの執成と
氣も付ず。酢でさいて呑む請合だて。近い譬へ桃の井殿。去年の饗應滯らず。勤られたで連署の役目。ナ勤させた
は誰が蔭。おれそれの義理順義。よう心得てお請有。左様共〳〵。夫りや言つしやる迄もない。弭秋殿も野暮ではな
いと。地鼻藥乞藥師寺と。熊手同士が フシ膝立る。爪彈して若狭之助。詞ハ、、、、御親父へ媚詔ひ。身共に勘氣を
請たる本藏。身を亡したが能手本。ナニ石堂殿にも氣を付られ。厚ふおれそれあられよと。地嘲る詞の端近き。弭秋
も莞爾と笑ひ。詞ナニサ〳〵彼聚飲の臣あらんより。寧ろ盜臣あらんとは古語の敎へ。鼠の族に國家を荒され。損な
はれざる用心をと。地當たる一句覺の兩人。詞ムウスリヤ。此佐平太を盜臣とな。イヤ藥師寺を鼠とは餘りの過言と
膝立直し。地互に藜る。フシ詞爭ひ。ヤレ双方控へと直義の。御眼尻にはつと計。左右へ逡巡二人と二人。烈しき御

聲高らかに。詞役目に似合ぬ未熟の爭ひ。双方共に怒を殘さず。鹽冶の雄鶏淀屋の雌鶏。雌雄の金鶏取揃へ。不日に都へ送るべし。佐平太も此通り師直へ言聞せよ。地早退出と暇給。フシ御納戸構へ入給へば。俱に群立諸大名溫和の愛も若狭之助。同じ役柄人柄の。けにくき高の佐平太が。跡に藥師寺式臺も。口强ならぬ右馬頭。淀屋と俱に請保つ。笑の眉毛の逆立ぬ。素直に。强き弓取の。道こそひける。三重、例なれ

貳　冊　目

薩日見し照葉も今日は埋れて。降積雪の。催しと人は。閑しき師走の半役目を高の師直父子奢に恐れぬ上屋敷。フシ世を我儘の振舞なり。地今宵饗應客儲けと床の間圍ひの箒掃除。妙婢しどもなき。フシ咄しも夢野のしがみへたり。詞ナント替つた屋敷ではないかいの。御隱居も同前なれど。御用繁い親旦那。偶丙に御座るといへば明ても暮てもお居間に計。所詮御寢間の上おろしにお手の掛るといふ樣な惠方果報もない事と。嗔氣沸せば茶の間のりん。詞そりやわしもぬかりはせぬ。日外御酒の過た晩。地夜更て。そつと。フシ往て見たれば。詞覗かれもせぬ隱れんぼ。三つの癖が　地六十の。莚も破らぬ悠んぼとはか思はれぬ。詞サア其悠い親御と違ひ。若殿の佐平太樣。此比爰へ有付た。お照殿を　地付け廻しつ。此方に札が落たなら。後とも言ぬに小鹽。詞ホンニ緣の言やる通り。仕たが利根なアノお照素人と見へぬ年恰好。アリヤ何處から來た奉公人。ハテお出入の小間物屋。彌六殿の口入でと。地人事陰言夕つく日。晴る雪道低下駄に。小間物荷箱背たら負。御用々々も長局。中戸の口へ來かゝれば。地ソレこそ爰へ彌六殿。松金の鬢付油。わしは尺長元結が切た。こちや白粉が足らいでの。此雪水で半化粧と。時にも合ぬ發才口。開る荷箱へ妙共撰取見どりが嵩取て。詞ナア買物は皆揃ふた。こちらも部屋で一休み。彌六殿は火鉢の番。地庭の雪見て一休み。お照殿にも知らそふと。フシ皆引連て入丙も。地挨拶そこ〳〵小間物屋。椽にそつぼり傍に心配り餘

つた歳暮の品々。縅て押込フシ椽の下。手早に煙草吸付て。詞ヱ大名には何が成。夏は泉水冬は雪。楠木の枝に積つた所。春の花見を思ひやると。地唖煙管の廊下より。梅の枝振細そりと腰は柳のあしらいも。不束ならぬ褄はづれ。花盆携へフシ出來を。地夫と目の張目遣ひに。何氣なき姿彼處に招き。詞先達て由良之助殿指圖を以て。此方を是へ入込されしも。師直が寢所の案内。篤と知らん謀。地様子は如何と問懸られおかるは。猶も聲潜め。詞サイナア夫故わたしをば能う見知つた伴内が。京へ往た留主を考へ。奥を勤て居はすれど。長ふ居る人にさへ寢間を知らせぬ身用心。況て馴染ぬ私等にと思ひ付たる。一工夫。高ふは言れぬ彌五郎様。コレ地斯々と囁き合。咄しの内も奥口の。氣がねに手筈の間もなし。是非に今宵は延さぬ用意。身共は長屋に待合さん。暮を相圖にアノ密事。計はれよとそこそこに示合して千崎彌五郎。フシ荷箱背負て出て行。地跡にフシ急ぎの。客儲け。花の枝振釣舟のぐれつく竿の差詰し。襖を開き立出て。後に恍惚見取るゝ佐平太。詞ハテしほらしいお照が手前地いつそ命を投入の取合せ。水際までに氣が揉る。ヱヽどふも〳〵と餘念の塵。拂ひもやらぬ鹽の目にいとゞ會釋の藤藝を。床の鴨居へ掛んにも屈兼たる腺を。ソレ足繼と抱き上れば。詞アヽ御勿體ない殿様の地お影で釣へ釣舟の。フシ曲はないかと見合す内。詞イヤ〳〵丁と其舟の。地持合へ我等が取楫と。さし込悪じやれ身を縮め。詞アヽコレ申悪い事何遊ばすと振放す。地はづみに轉ぶを猶取付手先ふツつりコリヤならぬと。放す間もなく起立て。詞行儀作法を。お紙しの。御家柄にも似合ぬ御無體。イヤサ無體な事はせぬ。尋常に應といや。其返報は玉の輿。お部屋様と云れふと。手廻りて朽果ふと。そちが勝手の返辭せい。どうじや〳〵と地抱付引付。蛇が見付し巣立の卵持餘したるフシ其所へ。地使者を勤て立歸る家來岩淵丹藏を。揉合ふ機會に引捕へ。探る袴の襠合に。フシ遁れて奥へ驅入跡。詞若殿是は何の事と。地頻も丹藏驚く佐平太。逃せし殘念むくりを隱し。詞ヤア其方は今夜の催ふし。右馬頭弾秋方へ。成程〳〵親旦那の御意を受。石堂殿を招待に參りし所。御町嚀のお使者と有て。彌暮方早々にお入有れる御口上。ホヽウ重疊〳〵。

往時切腹せし鹽冶判官が嫂浪人親師直を覘ふとの風聞故。鷲坂伴内を京都へ遣はし。由良之助が行跡を試す所。酒色に溺れて。組せし族も離散せしと内意の知らせ。アいか樣夫故當地の取沙汰。油斷なく聞合せと。脚腰の立奴もなければ御用心に及ばぬ事。ヲ、サ〳〵親父の病の根は拔たれど。心懸りは壹岐の城主石堂弾秋。日外御前でぬかした五背。鹽冶の家とは親しき一門。嫂浪人の腰を押まい物でもないと。雪景色を幸に。饗應んと呼寄るは。親人の深い所存。首尾よふ往けば隱居へ通ふ。此鍵も入ぬ物と。地内懷を搜して悔り。詞コリヤどふじや身共の外に。出入を留し親人の寢所の鍵。晝夜肌身を放さぬに。スリヤお失ひなされたか。ム、慥に今の女めが。地扨はと邪智の廻り椽。フシ時計の六つは。詞早入相客人入來に程有まい。地汝も來れと主從は隱居のフシ間へと立て行。出汐の月と諸共に。壹岐樣是へと玄關より。知らせに出向ふ高の師直。妙數多に傅かれ。フシ待程もなく。地右馬頭弾秋。供人數多を彼處に殘し。作法正しき上下の。裏表なき立派な骨柄。徐々と儲けの。フシ席に直らるれば。主此方に一揖し詞差てもなき愚庭の雪。御目に懸んと申入しに。苦寒を厭はず御來駕祝着。ソレ女子供お火鉢上よ。直に一間へ誘引の。圍で防ぐ寒夜の茶の湯。アイヤお心遣ひ御無用〳〵。身共が壹岐の館よりは。僅二里にも足ぬ行程。初老に滿たる弾秋なれ共。左程迄には耄ませぬ。先緩々とお咄しをと。地底へ響かす詞の探り。むつとはすれど遺の師直。詞ム、ウ貴殿の年とは拔群の某。耄と當付てさみしたるお詞か。ヤ近比耳が痛く存る。ハ、、、何の〳〵。斯花々敷女共を。手廻りに召使はるゝ。血氣盛んの師直殿。耄られふ樣がない。彼秦の趙高が例に劣らぬ此方の威勢。當時の諸侯に誰有て。さみする者が何ござらふ。いかにもおつしやれば左樣な物。執事連署の筆頭なれば。諸大名の記錄を預り。今師直が鹿を馬と申せば迚。誰が否と申そうぞ。近い譬は貴殿の御緣家。鹽冶などが能手本。恐らく足利殿の國家は。身が臺所同然でござるてさ。ハ、、、ハ、、、。いか樣なア去奉殿中にて。カノ鹽冶判官をゑぐり惡ふいぢらつしやれたも無理ではない。ヤ、、、何と。ハテ其如く額に微疵受てさへ。威勢强くなる貴殿。今度は斯耳で

も。鼻でも殺れさつしやれ。まだ此上に高なしの。榮耀奢はお望次第。ハレ調法なお體と。地嘲哢せられて短氣の師直。顔は天火と。フシ躁込無念。地侯思案に面を和らげ。詞桴秋殿のきついお嬲。いか様に仰られても。今宵は貴殿を目當の上客。地客は強者。亭主も曲者蕎麥切料理に。居風呂の。去嫌なき受答。イザ先奥へと饗應を。嚙こなす齒の石堂桴秋。然らばあれへと侍女共が。フシ案内に連て入影を。尻目に懸て師直が。我慢の皺に笑壺を顯し。詞其臆念と睨し故。茶の湯に仕懸し厩敗湯。想身を痿させ討取手段と氣も付ず。立越しは彼か自滅。が併し近習も召連ず。奥へ通る不敵奴。見せ付くれんと地咽ずんばい。唾を引夜詰立騒ぎ。中門口より奴の丑平。由ありげなる女の帶際。片手に擱て引立入。師直はじろりと眺め。詞コリヤ〳〵丑平女を手込は何事成ぞ。アイヤ桴秋様のお供の中へ。紛入込此女郎め。合點の行ぬ大膽者水喰はせて一詮議と。地庭井の傍にあらげなく。突据られて詮方涙。フシ小止雪さへ一頻り。地切戸の内より佐平太が。おかるを負へる拔刀。恐れて逃出る廣庭先。互に見合す顔と顔。詞ヤアあなたはかほよ。アヽコレ〳〵顔よふ見知て居てかもしらねど。こちには知らぬ名もない女子。必ず魚相言まいぞと。地くろめる詞を。悟す間もお照が目先へ拔身を突付。詞身が懷中した隱居の鍵うぬ何故に取匿した。イエ〳〵更々そんな物取た覺へは。ぬかすまい。盜取たに違ない。サ何者に頼れた有様に白狀ひろげ。イヤモどの様におつしやつても。ヤアしぶとい女郎め。白狀せずは降雪に衣類を引剝寒晒し。用捨致すなソレ丑平。詞早く〳〵と佐平太が。下知にまつかせ立懸り。上着をはぎもあらはの肌着。一重かよはき弱腕。腰に用意の早縄に。フシ縛重き此場の時宜。地見るに心も消入かほよ。遁がたなきうき涙。見取れ入たる師直は。詞和げ椽先より。詞鹽冶が妻のかほよとは今言消た詞の端。聞かぬ内から見忘ぬ我戀人。忍び入たは此師直を對所存が。ナニ此女がかほよとな。ハテ鰯網で鯨とやら。油ぎつた若後家殿。親人を敵抔とは小賢しい事。コリヤやいそちが夫鹽冶判官。親人の威勢をば妬く思つて彼狼藉。可惜しい大名株。玉子の様に踏潰

したは判官が無分別。大白痴から起つた事。ハ、、、、と　地出放題。詞コレサ悴そりや言はいでも知れた事。門外へも寄付ぬ腰拔の家中めらに煎じても呑せたい健氣のかほよ。ガ又此屋敷へ入込しは。差圖の仕人が有ふがな。アイお目立まする上からは。最早包まふ樣はなけれど入込ましたは私が一存。人の差圖は請ませぬ。ハ、、、、一つ穴の狐仲間供に紛らし引入た。弾秋への馳走役。ハテ好坪へ仕掛たなア。ム、コリヤ親人の宜御趣向。手次に女が問狀。鍵を盜で隱居の間へうぬも手引に違ひない。サ有樣にぬかし居らふとせちがはれ。おかるは我身の實苦より。お主の難義成行を。思廻せば張詰る。胸の氷の碎るつらさ。詞イエ〳〵誰にも頼まれぬ。鍵の失たも金輪際。ヤア知らぬとは横道者。ヤ大體の女でない。ソレ打据て憂目を見せよ。地畏つたと丑平が。鄭情も手荒き割竹。肩先居敷の用捨なく。打据〳〵責せつてう。嬶きお照が身の苦しみ。見るに目も嚥眦寄かほよ。詞ア、コレヤ寄まい〳〵おかばいなさるゝお志。盡未來際忘れねど。現在お主の。イヤサア惜ふもない此命。かばい立遊ばしたら其疑ひであなたの身に。ナ必々傍杖受て給はるなと。いふ聲さへも。しどろにて。吹雪に咽ぶ息切は。紅蓮の氷八寒の。憂目に增る呵責の杖。身を切る如く手は叶はず。綴る口さへ冷入ば。叫ぶ聲音の出兼て。消々とこそなりにけり。詞ヤイ〳〵丑平大事の囚人殺さぬやう。息を繼せて苦しませ。かほよは此地へ〳〵〳〵と和らぐ老人座敷へ招けば。詞ナニ親人かほよを呼寄何となさるゝ。ナニサ〳〵若い者の及ばぬ思案。師直が心は武藏野。貞心を稱美して匿ひ奥ると　地眞綿で針。猫撫聲を呑込む佐平太。詞庭木に括る詮議の女。此大雪に冷凍せ白狀せずば新身の切味。ガ又彼奥の客人を加減の茶の湯でいかぬ時は。ヲ、夫もぬからぬ年の功と。地床に懸たる半弓に。矢を取添て丑平招き。吹込毒氣を詫き〳〵。弓矢受取閨ひの下屋忍ぶ奴を。危ぶむかほよ。引立〳〵親と子が。馴合糸口繩付に。心を殘して奥に入。地跡は降積雪の外。身に添ふ物は泣ばかり。おかるは曇る顏振上。詞斯ならふとは露しらず。彌五郎樣にさつきの約束。儕やれ仕課せんと。佐平太巖が戲れの其内に奪ひ取た閨の鍵。地折を見合せ渡さんと。思ふ間もなふ此いましめ。せめて息

有其内に。敵を狙ふ旁の力と成て先の世で。勘平殿に告知らせ。譽られるのを樂しみに。果敢ない知死期を待内も。思ひがけないかほよ様。劔の中の此の屋敷へ。來り給ふは何事ぞ。詞もしもの事が有たなら。お主大事と　地様様に。盡した心も水の泡。何と詮方鳴響く。遠寺の後夜に降頻る。しまき颪や雪風の。吹折氷柱は身に立つ利劔。凌ぎ兼ては防ぐ手も。繩目に喰入血の涙。　フシ紅潛る風情なり。　地様子小陰に立聞丹藏。とは白雪を。忍び足せき立心小間物屋。此場へ駈付見るよりも。詞ヤアおかる殿。彌五郎様か。待兼ました。待て居た。ヲヽサ〳〵委細の様子はたつた今。聞と等しく來りしも。實苦を救はん爲計と。　地解く繩目に。詞イヤ〳〵〳〵。私を助けて見咎られ。過あらば詮なきのみか。未來の夫へ言譯なし。やつぱり此儘。此齒目に隱して置た閨の鍵。座敷の案内も今の内と。　地起も得やらぬ苦痛の惱み。髮さし付れば彌五郎が。心得二の齒解ほどき鍵取出し出來た〳〵。詞シテ〳〵館の案内は。寢所を右へ折廻り。坪の内の椽側より。ム、湯殿へ通れば物置か。アイ其奥が廣庭筋。柴部屋。　地長屋の通ひ道。詞ヲヽサ〳〵委しく承知と　地的中の。二人を狙ふ丹藏が。床脇よりも種が島。閨ひを飛來る手裏劔に。釣舟落て水ざんぶり。火繩消れば鐵砲を。打付る音聞付て。振向く彌五郎遁さじと。打て懸る岩淵が。拔身を透さず打落し。又拔かくるを刎飛し。引潛いてもんどり打たせ。拔間逃行丹藏を。　フシ遁さじ物と追懸行。詞彌五郎暫しと石堂狩秋。閨の間より徐々立出。詞目ざすは師直只一人。實否を見屆討せん爲。彼が方便に乘と見せ。入込し石堂が謀計に落入しは。天運循環。此上包に。及ばねど石淵を殺害せず。鐵砲消たる我仁心。おかるが案内の要害迄由良之助へ相しらせ。人數と俱に乘込れよ。女ばらは身共に任せ。　地早急がれよと聞より彌五郎。詞ハツハヽ、、、、恐入たる御厚情。兼て今宵を期したる故。藁苞は忍びの挑灯。　地串貝竹は繼梯子。紡針鍵繩に至る迄。歳暮の支度と准へて。斯まで下家へ運び儘ば。詞追付本望達する吉左右。片時も早くと勇立。　フシ表を指て翔行。透さず駈下りおかるが繩目。とくより謀の師直親子。隱居の間より動ぎ出。詞丑平めは何して居る。コリヤヤイ丑平〳〵。　地手筈は爰と敎へ

も。痿藥にひり〳〵と身動ならぬ有樣に。苛つ兩人騷がぬ弈秋。詞ホ、ウ最前我に進る茶の色。紫の泡立て。湯氣に變氣立登るは。痲敗湯の痿藥と推量し。根太下へ打明たるを。頰へ浴たる下郎がしびれ。ヤ念の入たる御馳走と。地手盛に挫まず冷笑。詞ナニサ〳〵弈秋が肩持と見て取た錯思案。ソレ〳〵悴人質に留置た。かほよを引出し糺明せよ。地畏つたと駈入丙。コレ〳〵待た佐平太殿。かほよは爰にと庭井戸から。地思ひがけなく立出れば。親子が悔り。詞ホ、身共が家老廣島源五右衞門が。後家の沖野。かほよと名乘せ入込したればこそ。師直が此贋物を計知たる右馬頭。ナニ某を贋者とは。ヲ、夫々額に去年の古疵迄。紛ひもない親人を。ヲ、サ贋物と見極めん爲。宛行置しかほよが贋者似ても似付ぬ沖野を捉へ。押推に見忘れぬ。變人のかほよとは。そちやどうして見知て居る。サ夫は。ハ、ハ、化の皮の剝れ口。サア正體を顯せ〳〵。ヲ、ソレ〳〵おかる樣と內通して言合したるさつきの仕組。誠のかほよと心得て閨へ立込置し故師直殿の拔道迄自然と知れたる此穀井戸探り出たも殿樣の深い方便のお指圖と。おかると俱に手番を。フシ悅事は限なし。詞ヤア重々憎い女めと。地二人を目掛切込佐平太。天の與へと落たる拔身。手ん手に拾ひ渡り合。フシ破かぶれと贋師直。石堂に打てかゝるを刎飛し。膝に引敷提緒のいましめ。庭には女を苦にせぬ强勢。見兼て弈秋遠殺しの。秘術にうんとフシ倒るゝ佐平太。二人を制して氣遣ひ致すな。詞十間殺しは石堂が家の極秘そいつに構はず此贋者が額の疵ソレ〳〵兩人洗見よと。地椽よりはつしと蹴落せば。ハツと兩人立掛り。雪を手早に摺付〳〵。洗へば疵も白髮も流れ。四十に足ぬ斑の黑髮。詞ハイ私は此家の譜代李右衞門と申者。ホ、ウ師直に能似たる儕をこつちへ取上て屋敷の廻りは身が胴勢。透間もなく堅置ば空を翔つて行んはしらず。地を潛る拔穴まで。顯し置ば袋の鼠。夜半を相圖に乘入る手筈と。地詞もいまだ終らぬ內。御迎ひの爲推參と。フシ白洲にこそはかつ蹲踞ふ。詞ソレ家來共。其贋者を連歸り。身が館に引据置と。引せる元の李右衞門。沖野おかるも弈秋の供の人數に引圍はせ。壽岐のフシ館へ歸らるゝ。地程もあらせず東西に。拍子木の音くはつし〳〵。大門碎く掛矢の響き。俄に騷く

屋敷の内。周章の際も京都より。フシ飛立鷺坂が。地勝手口よりフシ聲かけ付。詞ヤア申し若旦那佐平太様。佐平太様といふ聲に。地氣の付佐平太。詞仲内か遅かった〳〵。ハヽア夜を日に繼で今晩到着。今宵の様子聞たる故。もつ共猶豫は怖物と。地寢耳へ水の騒動に。俱に胡亂〳〵丑平も騒ぐ内より。三重〻鐘太郎。詞夜討じや〳〵切入た。遁すな怪我すな早逃よと。地夜詰の座頭蛇下婢。茶道小姓に至まで。銘々得物の鎗長刀。鞘口突やら弦張ぬ。弓を彈やら上を下。フシ更に分ちはなかりけり。後の襖さつと開。顯れ出るは誠の師直。詞コリヤ〳〵富士山が崩れて來ても氣遣ひない。我に續けと上を見ぬ。地鷲に引添ふ凧のぼり糸の縺るゝしどろ足踏途も。覺へず。三重〻隱ひ行く

三　冊　目

地榮耀にほたへる館の構へ。座敷〳〵も明渡し。軍慮にすゝどき由良之助四十餘人は馬挑灯。手番ひ定め貴入ば畳と輝くフシ廣庭先。周章騒いで逃行下部。偶々敵對ふ者あれば。千崎矢間郷右衛門。力彌掘部矢頭の面々。天と川との入亂れ。秘術を盡して　三重〻切立れば。地降雪よりも烈しき戰ひ。中にも岩淵丹藏が。拔刀にて踊出。詞ヤア痩浪人の及ばぬ腕立。刀の引導受取れと。地喰留懸るを重太郎。苛て突鎗打拂ひ。結び合ては振ほぐし。暫し勝負もフシ分ざりし。八相の手を卷崩し。脇腹ぐつすり突通され。無念と岩淵言せも立ず。止を指もフシ矢間が手並。地徒黨の人人爰彼處戰ふ内に大星力彌。佐平太に渡り合。詞親の最後の先駈せよと。地無二無三に打刀。開く肩口後さま切れて佐平太たち〳〵〳〵。藥師寺爰にと力彌が眞向。切てかゝるを換す間に。逃行佐平太捨鬣て。次郎左衛門遮さじと太刀差かさす力彌か勢ひ。氣を呑れて藥師寺も命から〴〵逃て行。言甲斐なしと奴の丑平。痺藥の本復に見せ付吳んと段平物。千崎彌五郎飛て出。懸合ぬ敵なれど商ひ得意の馴染だけ。地成佛させんと上段下段。切合半へ寺岡はかけ矢引提走寄。ヱヽ面倒なと首の骨どふど胴突體は微塵。氣味能かりける　フシ死ざまなり。地由良之助に引添て一味の人數

駈付〳〵。詞拔道までも立切て館の隈々搜せ共。師直には出合ず。風を喰うて落失しか。イヤ〳〵〳〵。斯まで固めて遁れん樣なし。弾秋公のお差圖の。柴部屋を最一度吟味。地畏つたと駈行先。矢間が鎗に突留て柴部屋よりも引出す。師直駈寄人々制する大星。詞年配と云額の古疵。覺悟有と。地言せも立ず。詞ヤア奇怪なる陪臣共。師直が死物狂ひと。地鎗引拔たる腰刀。打て懸るを由良之助透さず押へて首掻切。初太刀の跡に折重る。四十餘人が取圍み。鰐と擲く寸斗〳〵切。浮木に逢へる盲龜は是。三千年の優曇華の花を見たりや嬉しやと。躍上り飛上り。一度にはつと嬉し泣。斷せめて　三重へ哀なり。地暫く潛む裏門のくゞりを出るも明近き。思案そゞろに寺岡が。傍見廻し合印の。頭巾裝束脫捨〳〵。一つに括りフシ脊に負。地合羽包の文箱の緒。首に引掛大小ぼつ込。詞エヽ殘念〳〵本望達せし上からは諸士方諸共追腹と。思ひ込だ平右衞門に。由良之助樣のお指圖にて。お國へしらせの飛脚の役目。是も忠義と達てのお頼み。辭退ならざる此場の時宜。地ハテ是非なしと咳きの。隙もしろ〳〵夜明の鐘。詞南無三時かと　地驅出す。後に窺ふ伴内が。うぬをと懸るを刎飛され。又取付を引廻し。首筋腰際引摑み。まそつと伏されと高塀の。内へ閃々驚坂を。投越帶も引締て。驅出す足輕平右衞門。飛が如くに　三重へ行空の

第四冊

詞ヤア足利殿の嚴命を蒙る藥師寺。驚坂迎も上使同然。鹽冶崩れの浪人共。コリヤ家來共へ手向ひ致すか。アイヤ全く手向ひ仕るには有ね共。理不盡に御詮議とござる故。いかにも浪人共の手際少し許お目に掛る。シヤこしやくなと權威の兩人。地逸り切たる千崎矢間。留るは年配鄕右衞門。纏をかゝれと家來が口々。光明寺の廣庭先。海めきフシ合たる計なり。詞ヤレ旁暫時と。地聲を懸て立出る。大星由良助之良金。功成名遂此寺へ。籠居の内の丸腰も上を憚る身の謹み。上使に式禮事終り。詞主家の仇を報じてより。公の御裁斷待設けたる今日只今。何にもせよ御不審

の義。申開かぬ其内は。荒氣は上への恐れぞと　地慎み深き一言に。各々はつと心付。差控ゆれば次郎左衛門。詞ハヘ、、、腕なしの振ずんばいとは和ぬし等が事さ。足利殿の御不審別義でない。去冬高の館へ押寄。狼藉の夜。武將より御預けある。諸家の記錄幷に御添金千兩。行衛しれずと高の佐平太殿より。訴へ察する所浪人等が仕業ならんと評議一決。サア眞直に白狀せよと。地聞に堪らず鄉右衛門。詞御疑ひも事に寄。諸士の中に盜賊有とは餘し敷御詞と。迫立而色並居る義士。各々一同に立懸るを。猶も制して由良之助。詞コハ存寄ざる仰。本望遂なば泉下の主人に仕へんと欲する我々。何しに不義の所存を抱かん。イヤ其言譯暗い〳〵。あらがはれぬ證據が有ぞ。フム驚坂殿。證據とはな。ヲ、望ならばお目に掛ふと。地取出す金の短册。詞寺岡平右衛門と書記せし此短册覺が有か。成程〳〵。夜討の砌味方の者へ。附させ置し袖印さ。シテ其寺岡平右衛門は。ハア子細ござつて此場には。居ぬといふのか。居ぬ筈居ぬ筈。諸家の記錄お添金。二品を納置し寶藏に。落散有し此短册に。寺岡が姓名記せし上からは。知て有金子の盜賊。ヲ、伴内が申如く。二品の盜賊は平右衛門に相違なし。但し又足輕めが仕業でなくば。サア爰へ出し言譯させい。さなくば一味徒黨の者へ係る大罪。ソレ家來共縄打と。地重る難言無念の人々。指當る理に良金も。暫詞もフシなき折柄。地入來る桃井若狹助。詞ヤレ騷しい皆引と。地家來を退け悠々と。藥師寺に打向ひ。詞舊多夜討の砌より。大星父子を始め。人數を引分拙者が屋敷と。當光明寺へ預置るゝ諸士の始末。相糺すは身共が役目。嘗御不審有にもせよ。某へ屆もなく自己の詮議其意を得ず。殊に陪臣たる驚坂伴内。誰赦しての詮議呼はり。察する處桃井を輕んじての仕業なるや。サア返答有藥師寺殿と。地詰懸られて俄の廢亡。詞是は〳〵御尤。そこへ心の付ざりしは此方の不調法。ソレ驚坂もお詫をと。眞面になれば揉手の伴内。イヤモ主人を討れ愁歎の上。二品の紛失。何角心配故の失禮眞平御免と。地頻眞赤。しよげり返るぞフシ心地よき。地さのみはいかゞと面を和らげ。詞斯申も役目の表。必ず心に支られな。ナニ由良之助。殉死の願ひお上にも。御聞濟有にもせよ。計ざる珍事出來。旁返答いかゞぞと。地仰にはつ

と平伏し。詞身に覺なき無實の冷名。差當る寺岡は本國へ時限の早使。歸り次第に申譯と。地いふを打消そりや叶はぬ。詞何時戻らふやら知ぬ寺岡。落着は未の刻との嚴命。夫までに言譯立ずば。縛り首だ覺悟せよ。イヤ〳〵左は言れな藥師寺殿。諸士一統に付たる短册。殊に烈しき騷動の場所。落し有しを誠の盜賊。拾び取て科を負せる手も有事さ。未の刻迚二時計。夫迄待て遣はされい。ム、若狭殿の御意無下にも成まい。暫時が中は待ても吳ふが。七つの鐘の鳴迄に。寺岡が歸らぬ時は。ハア由良之助が二品の盜賊。詮議致して御覽に入れん。面白い。お預けなれば寺を限り。他出叶はぬ身を以て。いかにも此身此儘此場を去らず。確と七つの刻限迄。見事詮議を。御意には及ばぬ。イザ桃井殿先お先へ。然らば後刻と地藥師寺は。鷲坂引連客殿へ。フシ邪智を廻して入跡へ。地寺僧一人罷出。詞桃井樣へお願ひ有と。二人連の旅の女。門内迄參り居ます。いかゞ計ひ申さんと。地聞より扨はと若狭助。心の割符大星初。諸士の銘々式禮し。フシ殘らず立て入ければ。詞願ひと有れば聞捨られず。是へ通せと赦さるゝ。詞洩聞庭傳ひ。寠れやつるゝ旅勞れ。禮義計の白粉も。艶なき胸に只獨。フシ思ひ有げに座に着ば。地若狭助溫順に。詞途中におゐて乘物より見受たる其方願ひとは何事なるぞと。地仰に猶も手をつかへ。詞我々は都方より。病ふに恟む嫁諸共。鎌倉へ下りしは。厚恩有御主人の。石碑の在す此御寺へ。地心計の布施物ながら。御前の御赦し受し上と。押てのお願ひ。慮外の段は幾重にも。御免なされて下さりませと。携へ持し一腰を差出せば手に取上。詞見覺ある差添。布施物なりと言なすは。我預りの大星親子に。暇乞致させ吳よとの。願書代の一腰よな。ハアお慈悲深い桃井樣と。見かけまして御訟訴。嫁を御門に殘せしも。お暇願ひし家來の娘と。お呵りを憚る遠慮。不便と思し願の品。お聞屆給はらば。生々世々の御情と。地土邊に平伏し願ふにぞ。詞ム、夫婦親子の愛情さもあるべし。心を込たる願ひの一腰。桃井よきに計ふ間。當寺に暫く休息は。ナソレ心任せ。長途の勞殊に又。病ふに恟む嫁とやら。隨分慰り介抱有。用事有ば某へ地必ず遠慮無用ぞと。表を立る情の差圖。何とお禮の數々を。言ねど洩る有がた涙。隱し兼たる冥加なさ。

いざと寺僧が案内に。連て表へ桃井は。　フシ客舎をさして入にける。寺は俄の客設け。忙しき中を同宿共。熟た鼻の油取。墓の小陰に寄擧。詞ノウ念西。鑞冶浪人共が去年から。喰ひ潰したあげくの果。酸の大根のと混交鰡。入佛事なら布施にも成ふが。三文にもならぬ役害。詰らぬ物じやないかい。ソレイ孫子に傳へて。坊主にやど成物ではない。シタガ欲入。咄したい事が有と爰へ連ておじやつたは。サア折入て無心があるが。何と聞てくれる氣か。ム、無心といふてない事は。知て居やる欲入坊。錢銀の事では有まい。ヲイノ外でもないが。此寺の鐘撞は貴樣の役。今日の七つを一時か半時。早ふ撞て貰ひ度と計では合點が行まい。何を隱そふ此欲入。元は高の師直樣へ仲間奉公。失廢ての飯焚坊主。され共忘ぬ古主の敵。寺岡が戻らぬ中。七つの鐘を撞や否や。浪人共は縛り首。殺して仕廻ば且那の敵討たも同前。夫故の此頼みと。聞より西念顏色違へ。詞ヱ、めつそうな。預りの鐘つき違へたら。忽ちおれの身の上じやわいの。サ、、そこを頼が相弟子の好誼だけ。イヤ〳〵〳〵人を助る出家の身で大勢の命を取。釣鐘は得撞まい。そんならどうでも聞ぬじや迄。ヱ、置あがれづくにうめが。大事を聞れた上からは。欲入が百年目。もうコリヤ生ては置れぬはいやい。ヨウそふいや樣子を和尙へと。地駈出す首筋引戻し。どふど蹴倒し乘掛り。力に任せ衿絞に。フシくつと留たる呼吸の遥ひ。地折柄禪の勤時。木魚太鼓の物音に。紛れて夫と四苦八苦。手足をあをち死てげり。始終小陰に窺ふ伴內。詞欲入息は留つたか。ヤア驚坂樣そんなら樣子を。ヲ、最前より是にて殘らず。ホイ是非に及ばぬ。併こなたの爲にも主人の敵。浪人共を仕廻工み。見遁す心か繩打か。返答次第で思案が有と。地ちつとも挫まぬ。頬魂。伴內勇んで出かした〳〵。詞仲間風情の其方故。未だ面は見知らね共。遁忠臣感心せし。花は櫻煎餅坊主と。地譽そやされて落付欲入。詞然らば愚僧は此死骸。取片付て七つの鐘を。ヲ、撞が相圖にきやつらが自滅。味ない味い。併失たる二品が。若し出ぬ時はお家の越度。イヤ氣遣ない。紛失せしと足利殿へ。申上たは浪人共を罪に取て落さん計略。二品共に屋敷に有。出來た。シイ高い〳〵。其方は能時分。鐘撞終らば身が屋敷へ。スリヤ此働きを

功になされて。ヲ、還俗致させ以前の奉公。褒美は其時。ヱ、忝い。隨分ぬかるな。合點と。地示合して欲人は。屍骸を肩に鷲坂も別れて入や奥書院。地一圓相の窓を打。風も餘寒の フシ二月の空。地義心變ぜぬ操の松も花なき。春に大星良金。何角工夫の獨言。殉死願ひの時も時。計らさる公の御不審。加之らず桃井公。帶劔叶はぬ某へ。附與ある一腰。子細そあらんと地柄に手を。斯と洩聞次の間に。二人の女が聞ぞとも。白刄拔持打詠め。詞ム、加古川の重代波の平行安。是を持參の女とは。地我夫か舅御樣。此世の名殘只一目お逢なされて下されと言つゝ親子が明んとする。襖を押へて罷ならぬ。詞家を出て妻子を忘るゝは武士の常。僅に薄き此唐紙。明れば夫婦親と子の緣も是迄早歸れと卸す詞の錠前に。明ぬ岩戸の胸の闇。くらき思ひを打寄る。袖に小浪が寄方も涙 フシ先立ばかりなり。地斯と白洲の庭傳ひ。立出る千崎彌五郎。詞桃井公のお情にて得心は致しながら。上使を甲に氣儘の藥師寺。有無の返答疾せよと權威の催促。地貴殿の御賢慮いかゞぞと。急ども躁かぬ由良之助。詞藥師寺如きが侯奸を以て。謀らんとは及ばぬ〳〵。及ばぬ工は猿猴が。水の月取緣頭覺なき身の鉛も追付晴る。雲間の雁は後藤か目貫と。目貫の通ひに心を付よ。親鮫は傍に居れど。子鮫は二の切爰には居ぬぞ。折角來ても詮なき切刄。時節を待と差添に。擬へてしらす詞ぞと。悟る千崎母娘。互に心奥の間の。襖引明次郎左衞門。伴内召連 フシのさばり出。詞七つといふても間はない。時が立ても歸らぬ寺岡。明りが立ずは反逆人も同然。逆磔の仕置は遁れぬ。返答早くと重る雜言。地堪へ兼て駈寄千崎。押隔て由良之助。詞ホ、憤り至極ながら。開城以來の千辛萬苦。夫に比すれば瑣細の辛抱。七ツの時刻もまだ一時。急所でない待れよと。地一句の金言千鈞より。響く鐘樓に。撞出す鐘。して遣たりとぞくつく伴内。詞アレアレ〳〵今撞出したは大方七ツ。ソリヤこそ鳴つたは。今ので二つ。三ツ。四ツ。五ツ。六ツ。七ツ。八ツ。ア、八ツでは詰らぬはい。其筈ではと。地胸算用。三五の十八二九十六。桁違ふたる算盤の。呟やく鷲坂。挫まぬ藥師寺。詞ヤア半時一時待た迚。所詮言譯立まい〳〵。隙取ては上への恐れ。腕を廻せと地無法の フシ權柄。地大星莞爾と打

笑て。詞仰を待ず二品とも。疾より詮議致し置。ヤア〳〵兩僧早是へと。地聲に隨ひ同宿欲入。續て出來る念西坊。地見るより驚坂二度悔り。詞何々お肝が潰れたか。大星樣のお差圖で。欲入坊と云合せ。寺役の戻りに見て置た。地歌舞妓役者の身振を似せ。詞死て見せたはこなたの工み。繰出し位牌は出家に相應。手目が上つてこつぱい灰寄。仕上料理のぜんまいからくり。首尾よふ參つてお目出たいと。聞より伴内ヨウ〳〵〳〵。詞そんなら以前は師直公の。ヲヲ〳〵〳〵家來といふたは眞赤な。啖と一所に鐘撞坊主。欲入と名が敵役。しぶとい仕打でぼつくり往生。小六がはりもやり兼ぬ。どんな物じやと地兩人にひやらまづかれて恍惚驚坂。フシ投首するぞ心地よき。地大星重て。紛失せざる二品を。失しと武將へ訴へられしは。我々を罪に落さん佐平太殿の計略なりと驚坂が自身の白狀。此事露顯致すに於ては。足利殿を僞る大罪。咎なき内二品共。有所知しと言上有か。サ夫は。但しは某驚坂をくゝし上。二品の代りに御上使へお手渡し仕ふかな。サア其義は。サア〳〵サア〳〵何とと地詰寄千崎。二人の僧も禪棒追取。鄭伏せんず勢ひに。ア、申〳〵藥師寺樣。斯成たればもう叶はぬ。記錄も金子も屋敷に有たと。お屈なされて下されと。地いふもおろ〳〵。フシ獅嚙頻。地不省ト〳〵に次郎左衞門。詞由ない事を口走つた。伴内の大白痴。二品紛失を訴へしは。高の佐平太心得違ひと。武將へ言上いたし吳ふ。ム、さすれば諸士の疑ひも。念に及ばぬ言譯立た。ホ、大星始旁の潔白。是にて承知と。地若狹助。しづ〳〵と奥より立出。詞不糺しなる疎忽の訴へ。御咎めも有べき所。混雜の砌なれば赦し置。此上は諸家の記錄。御添金諸共別條なき旨言上の義延引せば。藥師寺殿。貴殿のお身にも係る御咎。早く早くと。地理の當然。詞成程とくより左樣存じ居つた。上體宜しく申上ん。ナント伴内。そふではないかい。イヤモ結構な桃井樣のお捌き。ア大星氏にも暫時の心配推察致た。斯申譯相立も。天道正直神や佛と。太神宮の御詫宣扨々感心仕ると。地片言交りのフシ追從口。地苦笑ひして若狹助。詞某は大星へ嚴命の趣有ば。跡より登城仕らん。藥師寺殿には先お先へ。フシ成程〳〵兎も角もと。地挨拶そこ〳〵。フシ出行兩人惣門迄。お見送りは千崎彌五郎。跡

に付添兩僧も門前さして急行。地既に日陰も傾きて。此世を申の時刻ぞと。威義を正して若狭助。詞即刻明り相立上は。心置なく由縁の人へ。對面の義は心任せ。地情も籠る演説に。由良之助謹て。詞ハア殘る方なき御厚情。御意を返すは恐ながら。申開き立にもせよ。妻子に逢んは死後の人口。此儘殉死の御願ひ。御許仰ぎ奉ると。地覺悟の詞次の間に洩聞くお石が曇聲。忠義一途に侍の。表を立るお願ひを。無理とは更々思はねど。爺御に離れ柱共。杖共頼む力彌にも。逢が別れの此小浪。夫を苦にして病身より傍で見る目のいぢらしさ。推量して給我夫と。歎けば俱にない嗾りこがれ〳〵た力彌様。お赦受ての契りさへ。一夜切なる憂別れ。せめて名殘に今一度。お顔が見たさ逢たさに禁て來た未練者。憎い奴じやと必ず。お呵りなされて下さんすなと。娘心の一筋を思ひ遣りつゝ諸袖に。涙を藹の姑も雨に霑るゝ俱涙。地若狭助聲烈し。詞イヤ〳〵歎く所でなし。ケ程功有旁なれば。助命させよと仰を受。認置し赦免狀。力彌が方へ告知さん。ヤア〳〵近習の者共早く參れと。地聞よりお石は泣入し嫁を引立椽より下へ突落し。詞小浪去た。ヱヽハテ縁切たれば他人のそなた。人の謗もないからは。逢たい人に逢たが能い。姑去に此母が。去た地〳〵と胴欲に。表は見せて心は情。頓智を感じてホヽ尤の計ひ。詞大星の縁切たる小浪。父本藏に成代り。今日歸參の奉公始。力彌への使者言付ると。地仰は耆婆が藥にも。增るはお主の惠ぞと。嬉し涙にお石も勇。詞お情籠る此役目。片時も早ふ。アイ〳〵〳〵。地是もやつぱり母様の。お慈悲〳〵と伏拜み。頓て立寄赦免状押戴きおしいたゞき。夫に逢を力草。病苦も忘れ勞たる足もしどろに桃井の。フシ館をさして急行。地後姿を滿くる涙。押隱して由良之助。詞重ね〴〵の御情。此上は拙者を始。諸士一統の落着を。ホヽ武士の鑑と成べき旁。助置度物なれ共。死罪を願ふ高の佐平太。元來徒黨の科有ば。願ひに任せ兎も角もと。地仰にハツと禮服を。フシ脱ば用意の白小袖。寺僧が運ぶ上下の。フシ無紋は死出の無常門。地開く一間に原千崎。小寺矢間に至るまで皆々。覺悟の死用意。地詞の端〴〵氣遣ふお石。詞申我夫助よと有御上意に。あなたお一人殉死を。お願ひなさるゝお心は。ヤア未練の繰

言。二君に仕へぬ一味の義士。某始一人も。助るべき所存有ふか。イヱ〳〵夫でも助けると。御上使様の御免し文。ハ、、、、赦免狀迚遣されしは悴を初め諸士の銘々。切腹御免の御書物。ヱ、イハアそんならどふでも助らぬ。地お命かいのと　フシどふと伏又も涙に暮居たる。地歎きを察し若狭助。白地に聞せなば。病苦に惱む小浪が命。即座に死せん不便さに。赦免狀と僞りしは。力彌に一目存生の。暇乞させん爲。是迚も本藏が。今端の恩愛察し遣り。地心計の追善そと。清き御目に浮涙。詞ハ、コハ有がたき御仁計。さは知ずして助かると。女心の一圖に思ひ。勇進んで立越しに。地助も殉死と聞ならば。其場で直に嫁が臨終。不便の者と計にて。慎深き良金も。こたへ兼たる憂涙。お石はいつそ正體なく。詞ホンニ思へばあじきない。現在夫が切腹の。地檢使代の御使とは。知らずいそ〳〵悦んで。往た心根がいぢらしい。海山越て死に來た。あの子計か親子御共。今を限りのお命と。思へば身も世も有れぬと。兼て覺期も今更に。取亂したる口說泣。間は隔ても隔なき。夫婦の歎想像。桃井始一座の諸士。恥て隱せどせき兼る。涙は膝に　フシ落瀧津。袴のひだに淵なせり。地早刻限ぞと近習の武士。短刀載たる三方を。諸士の前に　フシ指置ば。地各上使へ式禮し肩衣。刎退座を占れば。ハ、ア惜むべし〳〵。詞時刻來るに國許より歸らざる平右衞門。對面なくて殘念ならんと。地仁慈の仰に恐入。詞ハ、コハ有がたき御賢察。今端に及び何をか期さん。イザ御見屆下さるべしと。地氷の双手に取上。鋒突込膝樣。ノウコレ今は別かと。思はず岸波と襖の尻さし。ゆかんでばつたり轉込むお石。國許よりの歸り足息を量りに平右衞門。此體見るよりどつかと座し。詞ハツハ、夜を日に繼で急の道中。お國の手番達する上。御存生に御對面は。まだしも本望。拙者めも殉死と刀の柄に手を懸れば。詞ヤア狼狽られしか寺岡氏。夜討の場所より退けしも。深き所存有ての事。大星が末期に殘す貴殿へ遺書は。コレ此生花。ナニ梅花を拙者へ御遺書とはな。ホ事ならば折盡してん梅の花。我待人の來ても見なくに。今折盡す四十餘人貴殿は殉死を止つて。我待人はお家の榮見する命を生花の。秀句に鹽冶の御跡目。我亡跡も寺岡氏。地偏に願存ると。忠言重き大石に。

心魂徹する平右衛門。止る忠臣死するも義心。名殘雄鹿を慕ふ妻涙果しも。七ツの刻限。若狭助感じ入。詞ホ、遙々。異國本朝例なき義心の鏡大星の末期の願ひ。先達て行衛知ざる縫之助。有家知なば鹽冶の跡目國に替ても麁略は無いと。地聞より莞爾打笑て。詞ハ、ハ、、、、あら樂し。思ひは晴る身は捨る浮世の月にかゝる雲なし。いづれもさらばと並居る義士。我後れじと取直す。劔の光石の火の。はかなき譬有爲無常實に類なき武士の。辭世と俱に朽せざる。代々に名のみぞ　三夏殘しける

五　冊　目

宇治と桂と木津川口を。ひとつ流れの淀川筋を。下りや棹さす登は夜船。引や綱手の長繩手。陸は魚荷が多いさつさ。酒よ奈良茶よ。商ひ船の野鄙な。賞聲牧方堤。畫は往來もフシ絶間なき。道をいきせき。躓きし。石も鹽冶の縫之助。跡を慕ふて浮橋が脫て。廓の追人の者。漸追付。詞見付た浮橋。虫に成た縫之助。うせい。地〳〵と無法の手込。詮方盡たる威の刀わつとフシ恐れて逃行隙。浮橋おじやと手を引て。行を遠目に見付る大勢。又引返し京道の跡を。慕ふて追て行。地川は下りの大屋形。船を座敷と鳴物に。嘶立たる太鼓三味。龍田川には紅葉を流す粹の名取と難波に流す。よいや〳〵よいやな。水は。淀屋の辰五郎樣よ。都下りの此船遊び。よいや〳〵よいやな。地藝子法師に花車仲居。宋社が音頭取樽は。川市丸も及びなき。地岸は茂し柳陰。彼方此方と縫之助。逃迷ふたる浮橋が。フシ難義の樣子。船と陸見合す顏は。詞浮橋樣か。さふ云しやんすはあづま樣。あなたは鹽冶の若殿樣。辰五郎か。能い所で。追人に出合手詰の難義。イヤ其咄しは跡での事。先々船へソレ船頭。早ふ〳〵に漕寄〳〵。駈る歩行を縫之助。渡るも夢の浮橋が。乘もフシ心は關破り。捜せ〳〵と追人の者。駈來る間に。フシ漕出せば。ソリヤ關破りの浮橋太夫。二人を埋んだ屋形船。着よ戻せとフシ喚く聲。詞ハテかしましい關破り〳〵と。身受さへすりや言分有まい。ヲ

ヲ面白い浮橋太夫が身の代は。皆まで言ふな。五百兩でも千兩でも。客は淀屋の辰五郎じや。不足は有まい跡金は下り次第。當座の手附ソレ受取と地有合ふ金子。掴んで堤へばら〳〵。入日に躍く金の花。日相觀を目の前に寫す。榮花も身の行衞。水の流は定なき船は。遙に　三重へ遠ざかる

六　冊　目

地和泉に名にし大湊。堺の町の上に立人の用ひに天川屋。主義平は去年よりも。代官所に留られ。跡は家内も預け人の。緣邊涙の片思ひ。女房お園は憂中に。フシ笑顏も人を賴の氣兼。詞どなたにも御苦勞樣。地嘸お氣詰り酒一つと。差置盃臺女子共お銚子是へと挨拶振。太郎兵衞押留。詞ア、イヤ申し毎日〳〵町中が交替の御馳走で。足腰が痛入て。ハ、、、、と笑ふても居られぬ氣の毒な役目。ノウ久右殿。左樣〳〵。町中の上に立。是の旦那。去年から代官所に留置れ。此樣に番を致すも。是がほんの御大法。成程常から慈悲深ふて御發明で男一匹な義平樣。斯いふ災難が有ふとは住吉樣も御存知ない事。番するにも及ばね共一度づゝは町中がお見舞に參る心。盃は又重て。モウお暇申ませふ。ハテ御遠慮に及ばぬ事何はなく共心計。平に一ツと强られて。詞イエ〳〵萬事目出度ふ濟だ上。御祝義に下されます。カ。申あなたも隨分お身を大事に。お勞れの出ませぬやうと。地力を付て出る門口。地道は三里を三枚肩。走らす駕にも心の鞭。急げ〳〵と老のいら立。難波の名醫佐山良筑おろすと出るとフシ出合頭。詞ホウ是の舅御大坂の良筑樣。ようお見舞なされました。是は〳〵お町の衆御番の替りか御苦勞〳〵。早速ながらまだ落着の御沙汰もないかな。ハイ長引ましてお氣の毒じやがもふ濟でござりませう。御息女樣の御心遣ひ早ふお逢なさりませ。成程〳〵御深切忝い。駕の者は遠慮の中。宿を取て夜の内に迎ひに來い。ハテ扨それは入らぬ事町會所で留まする。サア〳〵ござれに近頃お世話。おさらば〳〵と地互のおれそれ内とフシ我家へ別れける。お園は聞知る父の聲。父樣

お越なされたかと娘が挨拶聞間も待ず。詞イヤもふ内に居るも心懸り毎日でも來たけれど。大切な。病家を引受捨置れぬが則仁術。老の五日目七日目に早駕で見舞に來るも。そなた衆夫婦孫が可愛さ。今町の衆に尋たが御免の沙汰もないとの事。ア、聞へぬは聟殿。出入のお屋敷町家でも。聞合して見る所が。專ら噂に天川屋は町人に希な魂四十餘人が敵討も義平が有た計に成就さした手柄者。見込で頼んだ大星殿いづれ劣らぬ忠臣義心と。大坂中でも此沙汰計。お上にも御感心。助け度思召と聟が口から白狀せねば。彌外に頼人が有ての事かとお疑ひ。懸りや獄につかるこちら迄跡の歎きを思やり。なぜ白狀はして呉ぬぞ。地女房子にまで隱さふと。親へ預けて置程の男氣な心から。打明なんだも尤じやが。詞謗り走りを聞たとて。他言する佐山じやない。樣子を聞て置たなら。今證人に成て出て。地助ける仕樣も有ふのに。聟でさへ此魂を疑ふて隱した物。知らぬ他人は猶の事。欲に目が闇娘を引取。聟が義心を妨げたか。敵役の良筑じやと淨璃瑠歌舞伎のてんがう書。芝居にでも取組んだら。地やんまひよや。友右衞門めが仕居るで有ふと。それがおりや口惜い。何の〳〵父樣の常の誠は知りながら。隱した主もよく〳〵の義理ある事でござんせふ。お前や私が精力でも。やんがて目出度ふ逢まする。其上今宵は義平殿の。樣子を尋る便りもある筈。地マア氣を鎭めて夜と俱に。宜い思案して下さんせと。悲しい涙押隱し親に仕ふる孝行心。フシ神も守りのなかるらん。地同じ神でも髮髭の延た手先の神樣株。破れ布子に繩の帶ねじけて見へる二三人。ハイ些とお頼申ます。書手紙を上ました者共でござりますと。地密めく聲に飛立お園。詞ようこそ〳〵。番の衆も逝で貰ひ指合人はござりません。サア〳〵こちへに。地おづ〳〵と閃姿に良筑目を付。詞人相と云其風體油斷のならぬ。何者じやと。地咎る老功。詞ア、ヱイナア。此お方々は義平殿と彼地で一所に。去年から心安ふなされたげな。今日お赦しが有た故。こちの人の言傳を聞て來て下さんしたが。餘り形が見苦しさに。今夜行ふと御叮嚀なお文の樣子。ア、それで聞へた。マア〳〵いづれもお目出たい。聟殿もあやかつて。どうぞ近々戻らるゝ樣。咄しも明たし。サ、是へと。フシ親子がいそ〳〵襞應ぶり。

詞イエ〳〵是が勝手でござります。ハテ遠慮深いひらに〳〵。イエ最ふ其處へ上りましてと。地身中の千手觀音を置いて逝んでは跡の御難義。矢張庭が分相應。詞ホウそんなら其處へ上敷でも。早ふ持て來い伊五よ〳〵。ヲツト心得勝手よりあはうが擔し縁取莞筵。フシ庭へさらりと引廣げ。皆能ふ來んしたの。サア此敷物に乘んせ〳〵。エ、めつそうな。敷に乘れとは此方が禁句。看す〳〵知た商賣も。闇い所に爰な旦那と一所に居た此三人。ほんに一門一家より睦じう致しまして。言傳も聞まする。ナア權よ。ヲ、何なりと用が有なら此方の女房に頼めて〻。それいやい氣の付た旦那殿。酒も存分呑だ上。商賣を始るなら。元資も貸て貰へて〻。ナアそれは〳〵男氣な深切なお方じやと。地追從交り三人が言並べたる得手勝手。詞ヲ、何が作聞悪い主の便りを聞嬉しさ。酒も上いで何とせふ。コリヤ伊五よ。用意して有酒肴を。ヤそこらをぬかつて宜物かと。地駈入取出す硯盞。詞コレ〳〵〳〵見やんせや。白いが蒲鉾黑いが生貝。コレ〳〵〳〵此胎屎色が燒玉子。どゑらふ飢へた五音の調子を。替るが邪魔じや。おれも一盃相伴をと。地雀から顧ふた五升樽。詞茶碗で手酌に始めた〳〵。サ、、、早ふ〳〵と地競懸つた。酒には目のないフシ一人のいがみ。詞へ、、、、是は〳〵お氣の付た久しぶりの御對面と。地茶碗片手に樽の口。ドフ〳〵〳〵〳〵。詞コリヤ御馳走でござります。ア、ゑいは身に付樣な甘露〳〵。仁三よ廻したけれど持た次手。マア一ツ呑して吳れ。ヲツト〳〵〳〵ござります。權よ。何ぞ肴せぬかい。エ、酒さへ見ると目のないたんぼめ。儕計ほざかずと此方へおこせと引聚り。地皆息なしのつよけ呑其間に內儀は三包の銀取出し並べ置。詞侮りがましい事なれど。是を元手に何成とも。直な商賣始めさとやんせ。エ、アノ此お銀を私ちへ。エ、有難い。男が男ならお內方迄。見事なお捌き。へ、戴きますでござりますと。地銘々摑みの鵰爪銀懷へフシ占たる顏付。傍からあはうが。詞コレぬすびの伯父樣。幸こちの掛屋敷大道筋の角引廻した東側に。西向の明家が有。彼處を借て商ひさんせ。エ、いま〳〵敷い。地今日出た此方等に引廻しの。西向のと指合計ぬかすがなハテ扨それは悪い聞やう。西向の明家を借て。店出さんかと言事じや。アレ

まだぬかすと　地三人が白眼付たるフシ腹立上戸。詞ア、申し今のはあはうが言損ひ氣に掛て下さんすな。爰に置ほど麁相計。アレぼんが泣聲がする。奥へいてすかして來いヱ、そんなら彼奴等計呑して。おりや奥へ行のかへ。ハテ細言云わずと早ふ行ぬか。サ、、、行はいな〳〵。コレぬすびの伯父樣。まだ爰に鯛の濱燒。是で機嫌を直しておくれ。ガコレ胴殼は突かふ共。わしが見入た樂しみの。首は置て行んせやと。地嫌がる詞を言散し。フシとつばかは奥へ逃て入。ホ、、、、呵るにも呵られぬ愚な奴。了簡して下さりませ。そうしてマアこちの人は息災で居られますか。何といふ言傳ぞどうぞ聞して下さりませと。フシせかぬ顏して問かくれば。ほんになあ肝心の言傳は。アノソレ櫨よ。われそこへ言ぬかい。ハテわれが先へ賴れたわれから言へと。地言兼るを良筑引取。詞ア、イヤ何も遠慮はいらぬ。どふぞ彼地へ行からは少々の責苦も有うち。包まずと聞して下されどうじや〳〵と。地親と子がせり騷る程顏見合せうち付中に一人の醉どれ。詞ヱ、埒の明ぬ奴等じやはい。いつそおれが口上るは。ガ其口明に又一盃。ア、よいは扨斯じやお聞なされ。アノ義平殿は。去年から。ヱ、謀反人の同類じやと。疑ひが掛つて有げなはいな。それでとり〳〵お尋なれど。ア、くろとも及ばぬ据つた物じや。言ぬとこそいへ〳〵。そこで手を替品をかへごして〳〵ごしぬいた其留りが。ナア仁三よ。けたいな物に成て來たじやて。ヤイ〳〵〳〵何言すぞい。仰山にぬかす故。アレ見い二人ながら泣てじやはい。ヱ、氣の毒なやつては有ぞい。何じや氣の毒。氣の毒ならば此跡は酒の力で又一ぱい。アアよいは。ヤ又斯呑据た所と云物は。首が無ふても構やせんは。まして己が體じやなし。且那で有ふが。お內儀樣でござらうが。人の首の五ツや六ツ。飛ても。拔ても構やせぬは。ヤイ仁三よ。權め爰へ來て足揉めと。地言つゝ轉り早鮮。フシ只ぐう〳〵の音計。地殘る二人も手持なく逃尻構へる空笑ひ。詞ハ、、、、へ、、、、。イヤモ名さへたんぼの喰どれ。必お案じなされますな。且那も隨分御機嫌能。追付目出たふ死る程に。アイヤ〳〵追付目出たふ逝る程に。內も奇麗に掃除して。ヲ、それ〳〵ぼん樣に風引すなとくれ〳〵のお言傳。お返事が有ならば。近い內に又

來る時聞てくれいて丶。へ、、、、イヤたわしらは。最ふお暇。コリヤたんぽよ起かい。ヱ、此ざまでは性根は付まい。お邪魔ながら醒る迄、庭の隅にと　地二人して。やんやのよいさらさと米俵こかせど起せど死人も同然。詞ハイ〳〵早ふお休みなされませと。地挨拶すれど諸さへ泣目を隱す親子が風情。詞仁三よ。權よ。アお氣の毒なと　地投首し萎々として出て行。地殘る思案は親と子が。心　フシ懸りの數々を。胸に呑込涙の雫落て。痞の種と成思ひ。フシ草とや生ぬらん。良筑漸顏振上。詞ヱ丶口惜いなア丶。大坂で佐山と呼れ。匕取中にも一二を爭ひ。いかな重病難病も。平癒さする覺はあれど。國法と云大病には。仲景が再來有。目前華陀が顯れても。配剤叶はぬ聖が命。地シヱ丶仕成たり殘念やと。吐息繼たる有樣に。地お園は袖に取縋り。詞コレと丶樣。そんなら彌義平殿は。科人に成て死しやんすかいなア。ヲ丶。譬死罪に逢ねば迚。手痛い事さへ知ぬ聖。今三人が詞の端。貴苦を請る計でも。何の命が續かふぞ。ハ丶ア。其苦しみを聞身さへ。地倶に呵責に逢心。若しもの事が有たならわたしやどふせふ何とせう。仕樣は無いかと丶樣と嚴詰らせて。フシ泣じやくり。詞ヲ丶道理じや道理じや。ガコリヤ只た一つの獨參湯。附子人參でもそれ〳〵の。症に依て能毒有。サ主方を換るが醫師の發明。此度の病には。大を取。小を捨るが醫案の第一。手後れのせぬ樣に。ナ娘。方を替るが其方の了簡。どふする心じやサ聞たいと。醫案によそへ由松を。代よと教へる。詞の謎。それと解てもいとし子を親の代りの捕われと。爲のみならず命まで。取れにやならぬ苦しさつらさ。詞サ丶サ丶、悲しいは理りじやが。コリヤやい。人の鏡となる聖を。見殺してはおれも其方も。人中へどうも顏が出されぬ。我子をかばへば夫の呵責。地獄の憂目は遁れぬぞよ。サア　地それも悲しゝ。詞合點が往たか。地あの子も可愛し。詞ヲ丶尤じや。地いづれ劣ぬ我子と我夫。詞代らるゝなら〳〵私が身は。地八裂一分樣にも代て二人の助る樣。思案して下さんせ。詞アイヤイ道理は道理じやがこりややい。おれじやや迚娘や孫。マ可愛ふて何とせう。誰が代つても濟事なら。末の近い此良筑。ア何の生て居やうぞやいと。地恨も混る悔し泣目さへ涙に塞がりし。子故の闇に親

娘。　フシ跡は譯なく成にけり。　地斯る歎の中仕切。襖くはらりと丁稚の伊五。　詞隱居はんお家はん。ヱ、泣事は無いわいな。コレ己がゑい思案をして置た。サコレ是見やんせと。　地重ねた半紙の粒々書。差出しても返事さへ。泣入二人が顏差覗き。　詞ヱ、これいなア。早ふ見て譽て下んせ。ヱ。ヱ。ヱ、つつともふ物言んせいのふ。大體こんたんした書樣じやないかなア。サ、見てお吳見ておくれ〳〵。コレ見てお吳いなア。ヱ、いかに愚な生れじや迚。心もない彼方へ行。コリヤあほうめ。生る死ぬるの大事の相談。邪魔せずとうせ居らぬか。サア娘。泣て居ては事が濟ぬ。彌〳〵孫を遣る心か。アイ〳〵よふ得心致しました。由松〳〵。爰へおじや。　地アイと。ぐわんぜも七ツ子の。敏捷至極の。器量よし。　詞祖父樣よふござつたのふ。ム、孫よ。爰へ來い　地ほんとちおじやと引寄て。　詞コレ由松父樣の代りにの。代官所へ行て給も　地やいのと言さしてわつと計りむせ返る。中に分入。　詞成らんぞ〳〵〳〵ヲ、。ぼん樣遣る事はならんはい。サア其爲の此書付じや。ドレ〳〵おれが讀で聞かそ。コレ聞かんせや。一理穴を以て願ひ上まゐらせ奉り候。ゑらいかへ〳〵。何とゑらかろがな。一ツ私は天河屋伊五。俗名あほうと云て。何にも存じませぬ不調法者。此方の旦那はんの代りに。ぼん樣を遣るとの事。それでは跡で淋しいさかいで。お家はんも泣しやる。隱居はんも泣しやる。又己も泣しやる程に。わしが首切て。旦那はんを堪忍しておくれべく候。殿樣まいる。伊五より。ヤアそんなら其書付は。主の代りに出る心。ヲ、殊勝らしい能いふた。よふ書て吳たなア。ソレ〳〵〳〵おれが行ふと言てさへ。其樣に泣んすのに。此幼少なぼん樣を。たつた一人遣らふとは。ヱ、胴欲な人樣じやはい。彼方へ行の。邪魔じやのと。呵られても大事ない。ぼん樣はやる事成ん。いやじやア〳〵。いやじや〳〵と　地足ずりし。さしの切たる鍋錢涙。拔た思案も一筋な忠義に不足なかりける。　地良筑も感じ入。　詞日頃あほうよ愚鈍者と。言た詞が恥かしい。出來した〳〵。ヲ、出かしたなア。それでもどゑらふ呵つてから。サイノウ呵つたはわしが誤り。了簡してたも堪忍しや。マ愚な氣にさへそふ思ふに。　地何のぼんが遣りたかろ。義理と世界の國法に取らるゝ命は此子が因

果。詞ヱ、そんならどふでもぼん様を。地ヲ、遣る母が氣は諸共に付て死より苦しいと。抱締たる稚子を可愛〳〵と祖父娘。別れの涙一時に波門の入江の。フシ霖日和浪打。寄る如くなり。地醉倒れたる以前の邪。堪へ兼てや大聲上。詞ヱ、へ、、、、。マ何にも知ずに愛しやのふ。皆其様になまたれるがうつとしさ。すぎなしで置たれど。モウ打明て聞さにやならぬ。コレがりまを遣ふのやるまいのと。いちや付は跡の祭り。肝心の助たがる代物はな。責に係つて存病付。わしに逝だら現妻や小悴が。まご付ぬ様に言て呉てゝ。ヱヘ、、、、狹少聲でほざかれたか。精一杯の遺言で　地ござつたはいのとフシ泣出せど。地家内は分らぬ唐音同然。心元ない様子なれど。良筑一圓合點が參らぬ。ガ詞の内に遺言とはナ。アノ此方の人かどふ致されましたへ。サイノウ水責火責はまだな事。荒縄で背中をこすり。一夜鹽を振おるか。又粒か玉錢の様に。此膝を切斷て。鉛込に迄する事じや物。遲いか早いかふらにやならぬ。アそれでも丈夫なとせう骨。素人には希な根性。あの和郎に盜人さしたら。遁なよい代物じやに。是計が殘り多ひ。ヱ、惜い事は。もふ今比は落たはいのふ。ムウ落たとは何が落たへ。アノ且那はんは二階にかいなア。ヱ、是はしたり呑込の悪い家じやはいの。コレ義平殿は病付て死だはいのふ。ヱ、そりやまあどふして。何として。地實か誠かほんまかと。親子はいつそ正體も。歎きも思ひも胸一ぱい。咽に詰つて詞さへ。詞とゝ様。コリヤまあどふせう〳〵ぞいな。サイヤイどふせぞいやい。どふせう〳〵〳〵と。地前後不覺に取亂し息もフシ絶入計なり。詞折から外面に棟威の高聲。上意〳〵と内に入。詞天川屋義平事お尋のケ條白狀に及ばず。今曉落命致せし故。家財を取上。妻子とも。國境よりお拂ひなさるゝ。ソレ者共　地はつと心得泣入親子を フシ引立れば。地良筑周章取縋り。詞いか體の罪にもせよ。暫の猶豫は下さる筈。地用意の間御容赦と。願へど小頭耳にも係ず。詞ヤア妨なさば打据よ。家財を運べと下知をなす。イヤ申〳〵お役人様。道具類は跡を廻し。マア金から手前でお仕舞なされと。地邪が指出。詞ヲヲサ能い心付。其丁稚めに案内させ。金箱改め持出せ。サ早く地〳〵と指圖して奥より手ん手に。持出す金箱フシ表の

方。お役人暫くと　地言つゝ通る。丸額月も。三五にフシ足ざる年菜。ムウ見た所は若輩なれど二腰させば武士の悴。待と留たは何用有て。アイヤ餘の義でござらぬ此家の一件。何故狼藉なさるゝな。ヤア狼藉とは慮外の一言。落命せし義平が跡式。受取歸る役目の某。ムウスリヤ　彌く　義平は落命とな。ヱヽ去迚は疑い深い若衆じやはいの。コレ一所に構つて居た其證人は已じやはいの。ハテ其方には尋ぬ控へて居れ。罪極らず相果し。義平が妻子を糺しもなく。追拂へとは胡亂な御上意。サアそれは。殊に家財を跡へ廻し。金銀を持出せと。此泥坊めと馴々しいお役人の取捌き。餘り不審に存じまして。サお尋申と　地立板に水を流せし詰開き。一器量あるフシ頻伽の鏃鳥。詞ヱ、是は又情ないませでは有はいの。二言辭吐ても高が小躰。いつその事お役人。けした　地〳〵と邪が目配。點頭小頭拔懸る。刀の柄留め確かと押へ。詞仕込だ衒の顯れ口。一人も遁しはせぬ。覺悟致せと突放せば。詞ヤア重々憎い素丁兒めと。地切込白刃を引ばづし。沈んで入身に付入手練。大の男を絹かつぎ。頭轉倒つさり投越す早業。詞汝奴らが衒の正銘は助命叶ひし義平殿。相果しといふコナ僞り者。ヒヤア。詮議仕ぬいて一々に。首を並ぶる其處動くなと。地尖き詞に氣を呑れ逃出す門先舁すへし。駕より飛出る天川屋。是はと驚る相盜共。突退刎退投倒せば。詞手目上られたら百年目と。地邪が組付首筋掴み。撞と捻伏乘掛れば。殘りは拍子ぬけ〳〵に。顚つ。フシ轉びつ逃歸る。地良筑お園は飛立計。詞ヤアほんに矢つ張り此方の人。聟殿無事に　地有たかと打て代りし悅び涙。詞ヲ、女房共。舅殿。坊主も無事で嬉しい〳〵。ガ衒は此奴か拵へ事。一所に居たとは何奴じやと。地引起して顏詠め。詞ヤ此方は進藤源四郎。盜賊衒と成しやつたの。ヱヽそんなら其盜人樣か。咄しに聞た大星樣の。ヲヽ甥と生れの惡黨者。不忠不孝の天の罰。ヤモ此形に成下る筈。が生置てはお家の名折いつそ爰でと　地締かゝる。詞ヤレ待れよ義平殿。惡人にもせよ手に掛ては。又もや其身に係る罪科。所存も有ば其儘〳〵。ヱヽ此以後根性直さつしやれと。地突飛されても負惜み。詞ヤイ義平め儕昔の好みも思はず。マむこつけなふ締上たぞよ。覺へて居れと　地滅らず口。足早にこそ

フシ出て行。地お園は頓て夫に縋り。二月三月と云物は案じに胸を痛める計。つらい責苦と聞たのに。よふ顔見せて下さんしたなア。詞思掛なふ戻らしやつた。御上の様子はどふじや聟殿。ハイイヤもう助かつた譯は私も存じませぬが。毎日〳〵手を替ての問狀。今日一日はアレアノお子様が。役目を代てお捌なされ。思ひも寄ず相濟て。戻りかゝつた内の様子。控へて聞とお指圖で。顯れた術の詮議。御器量と云御發明。マどなたの御子息様かは知らねど。義平が爲には命の親。ガマアあなたのお名は。何と申ます。アイヤ御合點參らぬ一通り。逐一お咄し申ませうと。地義平が手を取上座へ直し。詞鹽冶家の義士四十餘人が。事故なく本懷を達せしも。全く貴殿の大丈夫。ハヽア御芳志謝するに詞なし。私事は壹岐の家中。廣島家へ養子に參りし。大治郎でござります。ムヽスリヤあなたが大星様の。いかにも次男と生れし力彌が弟。是は仕たりと　地二度悔り　フシ又も下座へ押下り。詞エ扨々々御發明なと思ふたが。由良之助様の御子息様なら。そふなふて叶はぬ筈。敵討の様子も。捕はれて居る内に承りまして。モウ〳〵〳〵私が嬉しさ。責らるゝ苦しみは。手强ふ堪へて居りました。ガ其噂を聞た時は。ほんに涙が翻れまして。エ有難い事じやなア。命一つが御恩送りと。彌覺悟を極ました。ガ日本一の武士の鑑。お上にも麁末は有まい。お預とやら聞ましたが。シテもふ御歸國なされましたかと。地搔手繰程男氣に。言並たる眞實心。我身に當る大治郎。顏振上る目は涙。詞父を始兄力彌。四十餘人が諸共にお願申て四日以前。鎌倉にて殘らず切腹。エヽイ。スリヤ此方からお願なされて。義平殿。武士の身の上程。果敢ない物はござりませぬ。ホイア町人と侍の魂の違ふは爰。エお恥かしうございます。我も血脉は繼ながら。他家へ參りし武士の常。親兄にも引分れ。漸く寺岡平右衞門が密事の早打。誠に諸士の氏神にも。勝つたる其元を。苦しむるは本意ならず。我に代つて助け出せと。申越たる實父の文禮。見ると其儘主人へ願ひ。當地へ登つて願書を上。白狀なき始終の節義。言顯はして助けし今日。再度の早打父兄の最期。聞悲しさにいとゞ猶。身に犇々と御遣言。褒に入ての弔ひより此對面が父への追善。ハヽア悅ばしう存じますと。地涙を隱す立

派さは。泣よりも猶天川屋。ハヽヤモ御心底フシ察し入。詞町人風情の私を。お心に掛られて。あなた樣に仰付られ。お助下された由良之助樣の御厚恩。セヱ、有難う存じまする。サイナア。それ程迄に此方の人を。思ふて給はる大星樣。お殘り多いと申さうか。お目出たいと申まうか。女房。聟殿。舅殿。地お悼はしやと三人が見上見おろす大治郎。其鎌倉の別れの涙はら〳〵〳〵。爰に篠衝くフシ春の雨。外にも振來る足並も。揃ふ行列挾箱。臺笠立傘鎗印。かざり立たる牽馬も。爰に繫がるフシ奇緣の門先。詞大治郎殿へ御用に付。難波の留守居朝野起右衞門。地態々伺公致せしと。挨拶終つて上座に着き。在鎌倉の殿樣より。早打を以て上意の趣。御實父大星良金殿。本意を達し其上に。殉死有しは武道の龜鑑。其功を賞美の餘り。大治郎に元服させ。苗氏も改め是よりは。二代の大星由良之助。則ち當家の家老職。御加增四千七百石。四十七士の英名を。末世に傳る御墨附。イザ頂戴と地指出せば。詞ハツハ、、、、地是も偏に亡父が。忠義の餘光名君の御賜とフシ三拜九拜義平が家内も悅びに。フシ歎きを忘るゝ計なり。地役義終れば起右衞門。席を下つて兩手を突。大星殿の筐なれば殿にも慕ひ思し召。忌服の謹慎かりなく。早々出府致させよと重る上意。お供の用意も調へ置。早御發駕と勸むれば。地大治郎はつと恐入。詞斯計深き御惠御辭退申さば返つて憚り。此大恩は本國にて報ずる時節は。地改むる政事に心納方。豐に實のる麥秋粉秋。一ツ國の家老職。暇乞して牽馬に。乘移つたるフシ嫩の忠臣。地義平が悅び女房舅。祝ふフシ出世の門送り。詞イヤナニ義平殿。代官所の仰なれば。當地に住居は叶ひませぬぞ。ガ落付先はコレ此書付。ムヽシテ此證文はナ。亡父が方便に求し田畑。五十餘町は山科にてあばらやなれ共當座の隱れ家。セツヱ、有難ふござります。おさらば。お立。地實會稽の春に逢ふ。花の袂や兒櫻の。榮を見せて三重へ別れ行

七冊目

歌咲た櫻に土佐駒斑駒放れ駒。　お馬繋で花車や仲居が轡づら。牽たか〳〵どう〳〵〳〵。どうでも乘たはほてつばら。ワイ〳〵ワイトサ。新町のフシ九軒に並ぶ井筒屋に物言ふ化の幾座敷。フシ縞く勝手ぞ賑はしき。詞手の鳴方へ〳〵。捕まよ〳〵捕まへて酒呑そ。サア占たぞ〳〵。コリヤ旦那どうなされます。そういふ聲は番頭の惣兵衛か。アア仕舞〳〵。ヲヽ辰樣だんないわいな惣樣も粋じや物何の時代がつて居なませふぞいな。ヲヽさうじや。コリヤ番頭碎けやれ〳〵。ハテ内でこそ四角四面は番頭の表向。斯來た所は旦那も家來も一蓮託生。雪の肌より黄金の。光りで浮む千兩箱。お指圖の通り勝手迄持込ました。ソレ作兵衛早ふ〳〵。地心得亭主が勝手より。抱出たる千兩箱。座敷へどつさり。詞イヤ最ふ淀屋の白鼠。忠義一疋受て居ります。アヽ作兵衛登してくれな。其白鼠も旦州の黑鼠には。困つた物じやて。ヤア黑鼠じや。アヽおれを粋とは有難い。有かた次手に彼奴等にも見立盡して其金を。手柄次第に取せい〳〵。此奴はゑらいゑらはづみ。先番頭が金箱の。蓋を此ちらへ斯取て。裸小判の摑取めい〳〵見立て取たりな。アイと榮が取上る。小判と小判を遣違へ。鷹の羽の紋とはどうじやいな。コリヤ又しこひゑらし。こい私も頭へ斯上て。二枚襠とはどふじやいな。是はもじのが味やつた。次は仲居が五六兩。片手に廣けたてんしよ札よいあげ手とはどふで有。それは只今法度なり。跡は作兵衛が思ひ付。こいつをぐるりと斯並べ。相撲の土俵は。どうで有。夫では餘つ程捗が往た。此方も透さず稻吉が。兩手に小判を斯摑み。内懐へ斯入て。拔參とはどふで有。ヤイ〳〵其樣な事して參つたら。爰に居る榮ぼうの樣に道で馬に嚙れうぞよ。ヱヽ惣兵衛樣ぎゑんの惡い。したが是程有たら。馬所か天狗に摑まれても大事ござりませぬ。去とはゑらいお好樣。しつこけれ共作兵衛が。此二兩をば遣違へ。そりや鷹の羽か古いぞや。そんなら是も取て置。最一ツ土俵の繰返し。けん相撲とはどうで有。それも矢つ張古いなり。そんなら是も取て置。片手に小判八九兩。讀骨牌とはどうであろ。それも合せの歌句なり。去とは古いなら古い。古けりやいつそ新らしう。三色の見立を斯寄て。一所に受納はどうであろ。イヤ〳〵〳〵そりや成らぬ〳〵。成

らずは代つて辰五郎が。作兵衛に智惠貸さう。殘つた金を引寄て。ばらり〳〵と蒔散し。土器投とはどうで有。こりや又ゑらいと惣々が。拾ひ集むる山吹の。花吹散す其所へ。地京の六條の質屋の手代。つか〳〵閃で。詞イヤ申辰五郎樣。受戻し度と有彼代物。一體ありや鹽冶の重寶。ア、コレつか〳〵と物言まい。呼に遣つた京の正六。サ、爰へ來て一つ呑や。アイヱ〳〵酒所じやござりません。見りや澤山に有金で。つい埒の明た金の鷄。これはしたり〳〵。ア、貴樣も見立をやる氣じやな。遣る氣じや。〳〵〳〵。程に。欲くば一所に奥へ來い。イヱ〳〵見立じやござりません。彼ソレ今の鷄の。サア鷄々鷄しめさせ鍋燒さそ。やつさもつさは此方でせい。ソレ〳〵〳〵やつとせい。地踊に紛らし フシ打連入。地殘る惣兵衛小點頭亭主を呼留。詞コレ作兵衛。且那に金の遣はし鹽梅。どんな物じや〳〵。イヤモワウワ詰でござりますはい。さいのふ沸ふと涌出る井筒の作兵衛。追付金の釣瓶繩で。淀屋の水をかい出すは此鼻が胸中じや。彼是云間に節季前。定て附は出きて有ふ。ハイ〳〵則是にと差出せば。ホウよし〳〵。京行の雜用揚代。仲居共へ揃の衣裝。醫者の紙花〴〵た所が五百三拾五兩かい。外に中藤の取替小間物屋から何や彼や。是も大方百兩餘り。二口〴〵て六百三拾五兩の内。マア三拾五兩の端金は負に仕やと。地箱より小判掴み出し。詞一イ二ウ三イ四ウ五ツ六ツ。六百兩有扨此内一割引はお定まり。所を我等が顔づくで。正味の内を又二割半申し請る。宜か〳〵都合三割半。引殘つてマア三百九拾兩かい。是からが相場の段じやン算盤お越しや。壹兩五拾目の積で直せば。コウツ五九四十五。三五十五。銀高拾九貫五百目と成じや。是を又七拾目金にして其方へ拂ふは。宜か〳〵。カウツ七一加々の三。七五七十の一。七六八十の四。壹兩を七拾目に仕掛て。金高貳百七拾八兩二歩貳匁五分と成じや。宜か〳〵。此貳匁五分の所へ。南鐐一片くはつてはづんで遣たいが。是も次手に負て置や。ソレ金取たり。書出しに受取書たり。跡は我等がちやくぶくと。金懷へ フシ納めた顔。地作兵衛靴れて詞申〳〵。其樣やに酢に引粉に引。〴〵高六百兩餘りの内を。三百五拾六兩餘り引落されましては。揚屋は何に成ますぞいな。ハテおれじやといふて欲氣はないわ

いの。手代の役德せめて是程の。びんは有うちかい。それでも餘り。ハテ言やんないの。見立盡しで取やつたも餘つ程の事じやぞや。これから奥で殘りの金を撒散す。ガ言ぬ事は聞へぬ。其内でも二劃程は且那の頭字。たつを上るが合點かと。地指手引手の熊手性。苦い顔して生贈を。拔れた心地フシ亭主が投首。詞ハテ其代下に是からは隨分と儲けさす。爰な粹め〳〵。算用酒は預けて置。自立の時に張込やと。地金箱抱へいつそ〳〵。勇む。惣兵衞猩々舞。壺は亭主が。兜のもじ野。詞辰樣が呼なます早ふ〳〵に。地兩人は連て入相燈す火に。フシ廓は晝とざゞめきて。奥は騷ぎの太鼓三味。三筋の町を二ツばに。引摺り。散して仲居のお國。直に中戸へ通り者。庭の小石を小座敷の。障子目當にばら〳〵〳〵。知らせと心得辰五郎。外す書院の。詞お國じやないか。そんなら今のは。私じやないな。橋さまからの此お文を。太義じや有た返事は跡から。辰樣後にへ。歌實は心に思ひはせいであだな。惚た〳〵の口先はいかいつやでは有はいな。地あたり見回し辰五郎。何事やらんと心急き。釣燈籠の明をてらし。封じ解けば延紙に。フシまゐらせ候の散し書。奥は押への無理酒を。外す座敷の腰障子。明て吾妻が醉ざまし。見やるも不審。立聞惣兵衞庭より廻つて椽の下。見付られじと四這に。忍ぶと知らず讀む文を。繰下さねば下家には。あせる計。手は屆かず。それと吾妻が夜目遠目。扨は戀かと疑ひの。いとゞ心も廻り椽。足音聞付隱す文。椽の下には猶すかたん。吾妻はわざと何氣なふ。詞辰樣何して居なますへ。ヲ、太夫か遽ましい何じやいのふ。ア、何じや知らぬが面白さふな。何がいの。ヲヲげしん隱しなますないな。ム、わがみや何ぞ見やつたか。アイ見たでもなし。アノ見ぬでもなしか。アイ。ホイ。辰五郎樣。そりやお前聞くまません。地逢初てから一日も便り聞ねば氣も濟ず。うつら〳〵と夜を明し。晝寢ぬ程に思ひ詰難い苦界を樂しみと。思ふ私に增花の餘所に盛りが有ふとも。なぜ打明てくれもせず。隱しなました文よりも。讀ぬお前のお心と延の幾重を泣盡す。恨涙はそれしや程。愚痴に返へりし思ひなり。ヲ、此文の疑なら其れ篤くりと丶地投出す文。奥より亭主が。詞惣兵衞樣〳〵。地呼は心に覺のかすり。返事はならずこつそ〳〵。下家傳ひに

フシ忍び行。地吾妻は文を讀終り。詞ム、スリヤ此文は浮橋様から縫様の事を。コレ聲が高い。其文故の心遣ひ。まだ此上にと。地吾妻が手を取。庭に下り手拍子三ツ四ツ。相圖に集る藝子仲居。牽頭の稲吉亭主作兵衛。詞旦那首尾よふ。シイ。稲吉。作兵衛。榮おのぶ。頼んだ品は。ハイ教への通り見立盡して。貰ひました二百兩。三人中へ紙花の。集めた所が四五拾兩。此作兵衛も番頭めに。かすり取れた殘りの金子。合して丁ど五百兩。御用にお立下さりませと。地銘々包をフシ指出せば。詞皆の深切過分な〳〵。マア此金を待して有。京の手代へ早ふ〳〵。イヤ申そふなされては浮橋様の跡金が。ハアテまあ二三千兩攫拾たら。其身請も出來るはいの。そんなら質屋へ元利の内入。殘りは跡から遣ふといや。地心得たいこがフシ持て行。地吾妻は猶も重る不審。詞どぎ〳〵と合點が行ぬ辰様。皆の此體はヘ。ヲ、かくまふた縫之助様が。頼んで質にお入なされたゐんすの鶏。受戻す金の入用。世を忍ぶ若殿故。表立ては出されぬ金。皆を頼んで斯々と言合した今日の時宜。地淀屋殿よ長者よと大名の様に言れても。わづかの金の出入さへ。自由にならぬ人任。せめて手代の身分なら。今の御用に立ふ物。旦那に成た身の因果。推察仕やと儘ならぬ。悔に吾妻も俱涙。さふとは知らず恨んだは。矢張り私が愚痴ながら。詞皆様の心遣ひ。しんぞ忘れぬ嬉しいぞへ。何の〳〵勿體ない。師直贔屓の番頭が旦那の目を拔其内を。又引ぬいて上ますも。あなたのお金をあなたへ返し是迄お世話の御恩送り。我等もお家へ御恩送り。地とはいへ仕なれぬお氣苦勞。お寵さまやと誰々も。勤の涙打こして。眞實涙繰返す。廓の育ぞ頼もしき。地旦那〳〵と出て來る番頭。詞是はしたり明日は屋敷の御用。もうお歸りなされませ。いのふ〳〵。吾妻も一所に皆の者。いつもの通りおくれ〳〵。歌送り返せばひゐの山風身にしみて。榮種の花もうら枯。諷ひざゝめき行跡に。地引下つて番頭惣兵衛。詞旦那めをおだて上。かすりは十分味い〳〵。時に此比登つてわせた。驚坂殿から頼まれた。縫之助が有家。旦ののろまが知て居る筈。何處に埋んでおつたぞ。掻出す工夫が。有そうな物じやがなア。最前下家で手に入た此文。と地透し詠めて。詞ヤアコリヤ皆白紙。ア、そんなら吾妻めが口舌の

内。涙をふいた延紙を取違へたか。ヱ、白眼でこそは立歸る。地道は夜更て只一人。うさんな形に吠付犬。詞ヱ、情ない。畜生め。何で吠さらすのじや。シイ〳〵。ア、是は又難義な事では有ぞ。皆の奴等は土橋筋と思ふたに。通り筋から逝おつたそふな。ヱ、いま〳〵しい。大方今夜も七ツ過。提灯なしにおれ一人。むごひ目に合しおつたと。地つぶやく向ふへ。鷺坂伴内。提灯の火に見合す顔。詞ヤア伴内様。お身は惣兵衛か。ヱ、惣兵衛所かい犬におだてられて大難義して居ますはいなよう今迄待さつしやりました。されば〳〵。據なき用事に付思はぬ遲參。サア兼々お身に賴置た。さればいなア。其縫之助が有家。何でも旦めが知つてをる筈。一體鹽冶の出入と云。天川屋が弟なれば。忠義立は知た事。成程それ故藥師寺と言合せ。淀屋に傳はる金の雄鳥。節句迄に差上よと。上意ごかしに右の手段。出來ました其時には長者の跡式此惣兵衛へ下さる樣。ハテ氣遣致すなまだ外にと。地咄半に東西より。一犬吠れば萬犬が。隣横町向ひ町。集り吠付たけり聲。おへどわめけど多犬に二人。へこどれ廻つてやみくもに當途定めず三重、逃て行

八　冊　目

淀川の。流れの末に家富て。爰ぞ三國市司。百萬石も一筆に。買人賣人が附分る。大福長者と隱れなき。淀屋の奥の大騷ぎ。桃の節句の祝ひ日と。フシ子供が運ぶかけばんも。次第に並ぶ手代ども。素袍烏帽子も。大名出立。上段に主辰五郎。尤顔に詠やり。詞今日は一家老惣兵衛が思ひ付の大名格。其方達も官位昇進。地知行は腹の裂る程。大食すべしと有ければ。詞仰にや及ぶべき。平皿燒物其外も。地いかでか殘し申さんやと威義どう〳〵と箸の音。喰ひは互格の一日大名。詞番頭惣兵衛出仕なりと。地自身奏者の早替り。大紋の裾踏しやなぐり。顔にしるせしフシ摺足にて。地時代崩さず頭を下げ。詞今日の御祝義千鶴萬龜。恐悦至極奉ると。申上る此趣向。どんな物でござります。き

やうとい〳〵一入心も長閑やかに。地西王母が桃の酒。家老殿へ盃せふ。三方是へと。取上て。廻る盃祝言は。寂光の都喜見城の。樂も斯やと思ふ奢りの最中。地庭へ久三が。詞申〳〵節句の御禮か存じませぬが。八幡にござる天川屋の。旦那が是へと皆迄聞ず。何じや兄貴の手虫か。そりや堪らぬ。惣兵衛どふせふ。どふと言たら石部金吉。此形では居られませぬと。地俄のあはてにぐはつさ〴〵。烏帽子脱やら大紋を。脱す手代も亂騷ぎ。取繕ふて待間もなく。鑵虫出入の町人頭。みかけ計は天川屋。かうとう風の。絹ずれ男。詞是は〳〵兄者人。よふこそお下りなされました。ヲ、辰五郎。惣兵衛。無事で目出たい。今日は古郷住吉の汐干。夜船で下って今朝とふから。參詣した戻り道。夫はまあお早い事。御中飯もまだであろ。ソレ フシお盃と差配ぶる。詞ア、イヤ番頭。是へ寄たは辰五郎へ。言ねばならぬ事があろ故。密々ながら急度した用事じやと。地聞もどうやら底氣味の。悪い墨付辰五郎。詞密にと有御用事は。氣遣いな義じやござりませぬか。ヲ、わがみは何とも有まいが。辰五郎。親類とは云ながら。養子におこせば猶々義理の有此淀屋。義平が聞ては大恐た。ア、イヤ居間へ行てとつくりと。サアおじや。地早ふと先に立。勝手覺た一家中。是非も投首辰五郎。心フシならずも連立行。地殘るは惣兵衛獨言。詞兄貴のわせたは手を廻して。言てやつた工みの臍。旦ののろまを意見とは。古いやつの。斯して〳〵。斯やつて。是から直に隱居へも。あくぞもくぞ焚付て。淀屋の家は我等が丸呑。味い〳〵。が爰にある。手代敵がのろまの兄に。サア〳〵〳〵と投られるのも。古い奴。いつそでんどへ右の事。打まいた上押へ取。三方。四方。地コリヤ鬧しい節句働き。ぶせうで行ぬと。走入。それとは知らず。白張の。襖開けど打明て。言れぬ兄の志。意見も胸にしみ〴〵と。詞段々のお詞を。餘所に聞なす空言譯。隱すも矢つぱり大恩ある。鹽冶家の御爲じやと。御免なされて下されませへ。ア、役にも立ぬ悔言。地嘸お氣詰りと奥口を。見廻し魂床脇の。地袋あけて。手を取て。上座へ直す縫之助。フシ其身は遥に身をしさり。詞若殿様。今日は節句の御祝義。惣兵衛がすゝめを幸。勿體ながら。お大名のまねびをせしは。あなた様を心で祝ふ義

式の裝束。お家の御紋を染させしを。御着用はなされず共。頓て世に出給ふ樣。御先祖への御式日。地是にてお勤下されと。烏帽子裝束白臺に。乘て フシ差出し座を下れば。詞ヲ、過分なぞや辰五郎。兄の敵を得討ぬは。寶を失ふ身の誤り。其方衆の心にも。地嘸世話がひもなき者と。さみして居やらふ恥かしい。詞是は又お詞とも存ませぬ。其ゐんすの鷄も。お家と 則私が家に傳はる雌雄の名器。取揃へて差上よと。上意を請しが難義の幸。私が所持の雌鳥を。わざと隱して置ましたは。まさかの時にお祟りを。淀屋の家へ受る覺悟。ガそれ迄もない賀物に。お遣りなされた伏見の松屋へ。マア五百兩遣りさへすりや。何時でも手に入寶。お心慥に思召と。地力を付るも フシ誠なり。詞サア譬寶は手に入ても。欠落した浮樁が。ハテそれも親方へ。今宵中に身請すると。井筒屋で約束致し。關破りは濟します。アヽお氣の弱い。併し御尤でも有。きのふけふ迄私も。其樣な事計。ハヽヽヽ必お案じなされなと。地遂言事も色事に。思やりよき若氣同士。安心ならぬ實事なり。地次に足音折惡と。又も忍ばす縫之助。フシ隱す此方へ。詞旦那樣。何やらお目に掛りたいと御隱居樣が。是へお出か。そんならそこら片付いと。地座を改めて煙草盆。銀のきせるに吹く煙。そらさぬ顏で待居たる。地留氣の伽羅も夕部に消て。けさと替りし香染や。黨り計は振袖に。殘る姿も隱居の小庵。侍女が傳き立出れば。それと見るより辰五郎。詞御隱居には何御用でいざマア是へと。地互に禮義も。納る座並。詞ハイ參りしは外ならず。承はれば今日の節句に。町人の有まじいお大名のまねびとやら。萬一世間の沙汰と成ては家の障と。憚りながら御意見申も衣の役と。地つまぐる珠數の心も淸き。水晶輪。詞是は又譯もない。日本國の大小名御用を聞此淀屋。拜領の小袖上下家の冥加にかざらせたを。奢がましう申上たは。ヱヽ憎いやつと。地紛らす詞のおれそれを。傍に聞居る女共。元お云號の小庵樣。日外の御病氣から。男嫌ひと御出家同然。旦那樣も女房を。隱居樣。〳〵といかに家の娘御でも。ほんの是が立ごかし。親子御樣やら御夫婦やら。お娘御やら。御出家やら。ふしぎは三ツ四ツいつ見ても。六ツかしいお出合じやと。フシ笑ひも遠慮の中庭先。詞旦那お禮申

ますと。地はいるは井筒の。詞作じやないか。ハア、節句の御祝義何方も目出たく存じまゐらせ候。其次手に今一人禮者がござります。ドヲレ。地ちとお通りと呼入る。雪の。丸綿素人にめかせどそれ者の フシ粹仕立。詞ヤアそなたは吾妻。アノヤあづさ神子。ナ梓神子じやノウ作兵衛。頼んでやつたを間違ひなふ。是は〳〵御苦勞と。地俄慇懃三つ指割膝。折の悪いをくろめる氣轉。ウンと呑込作兵衛。詞成程急にと承り。天王寺へ廻りましたが。幸此神子殿も逢ねば濟ぬ事が有ると。ナア黒格子のお萬樣。アイわたしや神子でござんす。今表で惣兵衛樣に。何も角も聞て來たぞへ。そこにござるが小庵樣じやな。あた美しい事はいの。アヽコレ〳〵〳〵。それを神子が構ふ事か。初めて來て小庵樣の惣兵衛のとはきつい見通し。ノサそれ故に彼今の大名のまねび抔と。わんざんを云たやつ生口を寄て見る氣。地お賴申こなたへと。目まぜで押へる疳癪虫。つゝばる吾妻を無理遣に フシ連て座敷へ押直せば。地小庵は道町育ち。珍らしい梓神子。神佛一如の御敎。南無阿彌陀佛〳〵。ハヽア御隱居樣は信心者。扨お萬樣お始なされ。併道で供は見失ふ。道具は 幸 地有合す。床の文臺胡弓の弓。詞サテ何成と思ふ事をこれで寄たが地宜ござりますと。吾妻に渡せば恥かしさも。何の儘よの神おろし。悟氣のほむら張詰し。弓打鳴し。天精淨地精淨。詞アノ内儀清淨とは油斷がならぬ。詞振袖の戀衣に。結ぶの神は否じやぞへ。詞ハテ此辰五郎は六根清淨。物數云程。地春日明神。詞シタリかけ合の神おろしじやな。尾の出ぬ内に稲荷樣。妙見樣金比羅樣天神樣太夫樣ホイ。コリヤ差合の神じやはいのふ。サア。地變らぬ貴船の神ならば。釋迦の小神子が弦音に。來り フシ給へと寄添ば。地中へ分入女子共。詞目遣ひと云合點の行ぬ梓神子。作兵衛樣どふじやいなア。アヽイヤあれは今の生靈が問て紛つて嬉しやと。此神子殿に乘移つたのじやはいの。地エヽと惚りこはげ立振。見て取る吾妻。詞アイ生靈じや〳〵。此樣な事とは知らず。地夕部も中戸に夜明まで。松吹風の音ばかりして。見へぬはほんに胴欲なと。人目構はず打付に。厚いしかけの梓神子。戀の口寄千早振。神ならね共それぞとは。氣の付小庵も何氣なふ。生靈死靈も彌陀佛の。誓ひにもれぬ攝手不捨。人の恨も

ないやうに。お願申さん女共。なむあみだ佛と辰五郎に。粹を利して惣々が。宵のお勤なされたら雛の盃桃の縁。跡脈やかにとさゞめいて裏の隱居へ伴ひ入。影見送つて辰五郎。詞モウよい〳〵。思ひ掛なふ來た故に出放題の梓神子。間に合したは器用はだ何云しやんすから。惣兵衛樣に聞た樣子。小庵樣と一所に。地すかぬ仕方とまだ覺ぬ。心の湯玉辰五郎。詞是は又疑ひ深い。逢に行ぬも金の才覺。浮橋殿の身請のせつば。寶の献上何もかも覆重なる難義の最中。そこ所じやないわいの。エ、そりや大體の事じやない。ガ金の積りは出來たかへ。けもない〳〵。井筒思案は有まいか。ござります共。漸今ぬく〳〵の思案といふは小庵樣。元乞聟の旦那なれど。つん〳〵と成さゝる故當付ての佛なぶりと。此粹が見た目は違はぬ。今でも此方から持て參つて。陰裏の豆から取入金の工面。どんな物でございます。いか樣なふ。隱居料が付て有ば。五百兩や千兩は手元にも持て居る。此思案が上々吉。イエ〳〵地あじやらが誠に業平男。お前を遣つては氣が濟ぬ。詞ハテ些との内の御辛抱。跡は井筒が請合ます。旦那は直に御隱居へ。そりや合點と辰五郎。地二人は暫しと囁き諾き。フシ引別れてぞ入日影。地忍ぶ便と夕間ぐれ。氣は定ても去迚は。今宵に迫る三百兩。心當途も出來心。病も少しおり立庭に物好し。飛石傳ひ。駒下駄の音さへ。フシ餘所を忍び足。詞ア、思へば世界はあぢな物。淀屋殿の長者のと大名の樣に云はれても。金銀迚は人任せ。取なやまねば無も同前。別家の息子かせめて又。丁兒上りの手代でも三百兩は出來る物。因果な長者の旦那には。何が成た事じやしらぬ。アヽ斯いふ譯は御存知なく。兄者人の御意見も。歌餘所に梨子地の硯箱。明ていはれぬ憂事計り。詞ム、常から堅い隱居家に珍しい彈調ひは。女子共が節句の遊びか。何にもせよ言寄綱。とはいへ是迄嫌ふた中。遂誠とは思ふまい。歌今身の上となる鐘ならば。可愛からふに儘ならぬ。詞イヤ〳〵〳〵。家にも身にもかへぬ大事。もし聞入ずは命づく。歌たとへどふした憂目にあをと。鬼住里の勤であろと。男ゆゑなら私しや苦にならぬ。詞誰じや〳〵何者じや。そふ云は小庵樣か。辰五郎樣。いづれへお出なまれまする。御隱居には何しに爰へ。あなたにちつと願ひが有て。

こつちも密に頼の用事。聞屆けて下さりますか。何なり共否とは申さぬ。サア其譯は。サアそれはな口で言れぬ私が願ひ。地立てしらせを待合の。撞木取上鳴物を。フシ數うちよりも妙婢取々に。詞嫁入じや〳〵。御隱居樣の嫁入じや。地雛の道具を假荷物。行器も。對の屏風箱。小袖簞笥も二棹三棹。十三筋のかざり琴。いづれに緣を引ぞとは白地塗地の長持も。フシ所せまき迄置並べ。地小庵樣のお願ひは。是で推もじ遊ばしませ。詞ムウ雛の道具で嫁入とは。ア、解ました。出家を止るお心かと。地問れていとど恥かしながら。業平樣に留られて髮剃さぬが今の仕合。必笑ふて下さんすなと。ほころび係る花の香は。フシ誘ふ嵐ぞ穗に籠る。詞何の〳〵。其願ひなら千代かけて急度聞氣の辰五郎。ヱ、そんならあなたも得心で。殿御持ても大事ないかへ。ハテ末長ふ添たが宜い。地幸けふは花の緣。曲水の盃事。善は急げじや女共。早ふ〳〵と明た口。持て出たる桃の酒。フシ嫁御へ酌て其跡を請る聟顏あての槌違ふて外へ運ぶ鶴。詞ア、コリヤ其盃をどこへやる。ハイお赦しの出た御祝言。フシ戀人樣へと云捨行。詞ヤア〳〵戀人とはそりや誰事と。地急ど此方は今更に。言ねばならぬ。地身の徒。いつぞや芝居見物に歌舞妓役者の其中に。所緣の色は紫の。藤田靱負と云人を。地思ひこがれて忍び寢に數重なりし妹脊中。詞ム、そりや道頓堀の女形。何の事じやと地辰五郎。昨日にかはる放埒に。フシけふを覺せし計なり。競掛つて殘りの妙。詞ほんにめでたい三々九度。聟樣も嘸お待兼。是から直にお閨で。又改ての新枕。斟酌なしにとすゝめられ。赤らむ顏に袖屏風。フシ中に取卷入跡に。地むしやくしや腹も打こして獨とほんと辰五郎。詞チヱ扨見せ付て仕おつたな。手詰の金に跡先見へず。已惚して恥頰かき。ヱ、面目ない口惜いと。地身をふるはせし。男泣。地窺ふ吾妻も案の外。詞辰五郎樣コリヤどうじやへ。尼の身だてら餘りなだらくもよい加減。よい〳〵。いつも踏込て恥係すが腹いせじやと。駈入裾を引留め。詞コレモシ負をしみは退て置て。嫌はるゝはおりや嬉しい。義理のある家の娘。氣に入た樣にして頼まにやならぬ身受の金。イ、ヱイナ。浮橋樣も誰じややら。請出したとの知らせを聞。作兵衞樣が行しやんしたぞへ。ヤア〳〵〳〵。

そんなら金は跡へんか。地ハアはつと驚く氣はそどろ。堪へ〳〵し口惜涙。詞是非に及ばぬサアおじやと。地屹相かはつてかけ寄茶の間。向ふに立たは天川屋。詞ヤア兄者人かと迯出す。地胸づくし取て引すへ。詞コリヤ待おらふ。小庵が今の不心底。見事儕も腹が立か。廓通ひの居つゞけ嫌はれて居た娘の心。我身つめつて人の痛みを知居らぬか。其上最前も大切な金の鶏。卒爾はないと吐したが。藏を見れば箱は明がら。サどこへ遣つた先をいへ。サアそれはな。エ、情ない心じやな。コリヤやい。今日中に寶を差上ねば此家は潰れるぞよ。ハア。ア、伯父の家とは云ながら一人の娘に娶合せよと。お果なされた殿様が。町人風情に勿體ないお聲をかけられ。請繼だ此名跡潰して濟か。罰當りめが。殿へは不忠。伯父へは不孝。サ、寶はどふじや。サア。サアサア〳〵。エ、言ぬかと引寄て。擲く扇の親骨に。かはりし兄が強意見。見兼て吾妻が。詞コレ申し辰様に科はない其鶏は。ア、コレ何にも云まい地兄者人の御存分に。地ヲ、よい了簡と疊掛。打手に縋つて聲を上。詞コレ申其寶はござんすはいなア。地それ云はしてはと辰五郎。あせるを義平押退て。詞ナニ寶の有所を知てゐるか。アイ〳〵〳〵辰五郎様堪忍して下さんせ。現在兄御の責打擲。是が默止て居られませふかいな〳〵。詞サ、、、、そりやよい。仔細はどうじや。アイ。どふじや〳〵〳〵。アイ〳〵〳〵。鹽冶のお家の雄鳥とやらを。縫之助様が賀におやりなされた故。一ツに上る淀屋の雌鳥。あちらが出る迄隱して置と。井筒屋へ預けさしやんしてな。ム、。シテ〳〵跡はどふぢや〳〵。サア延引の科は淀屋へ引受ると。たわいのない放埒も金の才覺縫様のお爲じやと。いとしい程心遣ひ。仇事にして云明すも。地矢張お前が大切さ。必呵つて下さんすなと。縋る貞節。弟が義心。始めて聞て天川屋。詞スリヤ大恩ある鹽冶のお爲身を捨ての心遣ひか。ヲ、出かした〳〵地〳〵なア。兄に優つた御恩送り。打擲仕たは義平が誤り。こらへて吳と引寄て。手を取かはす兄弟が。胸も心も一時にとけて流れは。淀川に涙の。水倍增りける。何時の間にかは圍の障子。朱の色增す大振袖も。しどけ媚く娘の小庵。詞辰五郎様段々のおせもして殿御を持ば。此家は血脉の私が納ます。あな

たは里へお歸り遊ばしお氣に入た其女中と。お添なさるが互の御勝手。義平様お連申て下さりませと。すつかり云出す不緣の挨拶。聞兼て辰五郎。詞スリヤ隱し男に心中立。我を追出す心じやなとせき立傍から吾妻も俱に。詞ほんに〳〵厚皮な尼の身での役者狂ひ義理も法も世間の聞へも。何とも思はぬ徒娘。あの恥しらず道しらずと。地二人がつのめ立腹を押ゆる義平が一思案。地工の壺へはまつた惣兵衞。小陰を出て高笑ひ。詞ハア、大禍長者の旦那と成。惡ほだへした報は目前。今日からは女名前。此番頭が代判して淀屋の家は萬々年。納るは此願書御寮人様わたくしや直に代官所へ。ヲ、其方に任す早う行きや。こんで居りますて所緣かゝりのない所にうろ〳〵して居るのろまたち。ぼいまくつてお仕まいと。地當り眼の鼻油いきり切てぞ急ぎ行。詞エ、儕迄が其惡口。地堪忍ならぬと立懸るを。詞コリヤ〳〵〳〵今と成て何むだ云。言程此方の恥の上塗それじやといふて此儘では。ハテ捨置れぬは忠義の一ツ。大事を忘るゝ場所ではないかや。小庵殿。辰五郎は此兄がしつかりと請取ました。吾妻も一ツ所に。いざ〳〵と。フシ二人を引立立出るを。地娘は聾かけ。詞辰五郎様。行しやんすなら此世の名殘。未來は女夫とたつた一言聞かしていて下さんせ。何と。命にかけた役者狂ひ。其戀人の年季證文。是持ていて下さんせと。地投出す一通いぶかしながら。詞ヤアコリヤ浮橋殿の身請の證文。スリヤ請出した客といふのも。アイあなたのお氣が休めたさ。縫之助様諸共に密に八幡の下屋敷へ。そんなら放埒惰弱と見せたも。辰様への惡口も皆僞りでござんすかへ。地僞りかとは胴欲な。お爲で無ふて言れませふか。詞惡者共に隱さふと心遣ひの其中に。今日につゞまる寶の紛失家さへ續ばわたしが身に。地かゝる難義が嬉しうて覺悟極めた御身代り。詞扨はそふ云ふ氣で有たか。つひに優しい詞さへ一言掛ぬ辰五郎を夫程迄の深切は。忝いぞや嬉しいぞやのふ勿體ない。是迄お氣に入ぬのはみんな私が不調法。詞イエ〳〵〳〵そふ美しう仰しやつても。皆此吾妻がさす業と嘸憎かつたでござんせふ。詞イ、エイナ大事な殿御を大切にして下さるは私や嬉しい。アレ又あんな事計。私こそ腹立儘。役者狂の徒娘。義理も法も忘れたかと言たのが。恥かしいや

ら悲しいやら。どふも顔が上られぬわいな小庵樓。詞それよりは此辰五郎科を負せて逝れふか。お咎請るは兼ての覺悟。イヽヤ私が。イヤわしがと誠を立る三人が。心々をおもひやり。遠貞女つつかくる涙まぶたに天川屋過し難義の。責苦にも百倍越し思ひなり。フシ早明過て表には。寄ます〳〵。地拍子木の音賑わしく。聞へける。詞アレ〳〵相場を始める知らせ群集に紛れてお早ふ〳〵。實尤米市を浪花に始めし此淀屋。今日の相場の終る迄。お祟ないは家の德。小庵殿は女義の事。代判なれば惣兵衞へ科をかづけて日を延し。雌雄の鷄揃ひし上。萬事目出たふ義平が計らひ。暫時の別れと誘られ。出る二人に留まる娘。言たひ事も今更に。つゝむほむらの火繩さへ。消る心の物案じ。祭りし雛の甲斐もなく離れ〳〵の女夫中頓てぞ歸る大坂に名のみ殘して　三重へ賑はしき。地淀屋の表は帳合正米内證とら市。日本一の商ひに。儲る取込すくひ込。金は石砂水番か。早迫立る水放れ。人數に紛れ三人が。フシ出る姿を戻り足。見付る惣兵衞コリヤどこへ。詞代官所の仰には疑かゝる辰五郎。返しはせぬと取付番頭。地コリヤ何ひろぐと天川屋。支る手利のいれ股に。丁ど蹴飛す五りん飛。遣ても取たと又組付。フシ委細はしらぬ買使。地仲衆仲間が目を付て。旦那に向ふて立づく番頭。しめてこませと助け米。地可愛がられぬしるしにや。打す堂島米市の群集に紛れ三人は。八幡を。指てぞ　三重へ落て行

九　冊　目

何方に。鳴て行らん。時鳥。淀伏見まで京よりは。三里に足らぬ長繩手。夏さへ半竹田街道。繁るかしこの藪際に。他國と見へぬ人手代。切殺されし非道の劍。葉に置露も短夜の。フシ死期を告て息絶たり。地止めをさしもの源四郎。血刀拭ひ傍を見廻し。詞今鳴たは早七ツ。夜明ぬ内と。地傍なる。風呂敷包押戴き。詞此代物を手廻ふとよつ程の骨折と。地呟く向ふへ徒士若黨。箱挑灯の劍麥は。目印目かどの藥師寺殿。よさ折柄と猶豫内。件の死骸に驚

く供人。跡に引添鷺坂伴内。何事やらんと騙寄ば。詞イヤコレ騙んすな。おれじやはいの。ヤアこなたは淮藤源四郎。シテ彼密事の一件は。ヤレ鷺坂暫くと。乘物よりおり立。次郎左衞門。詞ヤイ〳〵者共。身共は是に暫用事。我達は先へ馳。久世の渡しで相待おれと。地供の人數を追やり〳〵。三人かしこにこぞり寄り。詞鹽冶扇れの源四郎。此藥師寺へ奉公望めど。佐平太殿と合體し。大望ある我々なれば。咖爾に心赦されず。縫之助めが賀物に差入し。彼鷄の片片。奪取て相渡さば。褒美の金子與へし上。品に依て召抱へんと約諾したは先々月。ヲ、サ聞れる通り。主人師直討れ給ふ其後は。此伴内も御家來に召遣はる、此砌。貴殿の頼みは餘義なふても。うかつの取次成がたく身共も念を入たりと。地咄しもひそ〳〵包を開き。詞サアそこらをぬかつて宜い物かい。八幡へひつそくして居る。淀屋が方から受戻した此鷄京の質屋松屋の手代が持てうせる此街道に待伏してばらして取ても氣しんどな奉公より。とかく褒美の大金をと。地欲惡不敵フシ類なき。地金の鷄手に取て。藥師寺はためつすがめつ。詞ホ、ウ出かいた〳〵殺して取といい跡腹やまず。容易手に入此軍寶。足利殿の命に依つて。天龍寺の御普請に上洛せし某と石堂。深草の屋敷より未明に嶮峨へ立越る。道で逢たもよい手番と。地内懷へしつかと納め。詞褒美の金子は望に任さん。短夜の勞休息旁。持參の冷酒を遣し呉よ。地畏つたと殘し置茶辨當より取出す瓶子。酒に目のない笑ひ顔。詞ハ、、、、コリヤ有難いは御褒美違はぬかための盃。伴内様石五器は有まいかい。ヤ幸〳〵。盃がはりは此馬柄杓。ヲツトよいはと地片手に瓶子の口からどぶ〳〵〳〵。ぐつと一息。詞ア、伽羅じや〳〵。地ドレ最一ツと又どぶ〳〵〳〵〳〵。詞ア、空腹に込付てやつた故。コリヤ急にござつたはいの。好物と知て態々お持せに預るとは。酒呑冥加に叶ふた仕合。大名でも藥師寺様は邪人じやはい何でも忍らふ御褒美を力づいたら。天鵞絨の柳繡に縫でもさして。金拵への刀きめて。踊込にかまつてこまそふ。ハ、味い〳〵。ヤ是を肴に最一ツと。地言も卷舌くだ半分。よき時分ぞと伴内が袖に藏せし用意の一藥。そつと瓶子へ入るとは。夢にも夫と白銀の。瓶子取上口から口へ。銚子有たけ斯の通りじや。詞サア

サア肴には褒美の金を。ヲ、最前より認置し此一通こそ金子のかはりと。地差出す書物受取源四郎。押戴げてとつくと見。詞此頼みを他言させまいと。唖に成薬を呑せ。事成就した上で即座に治する妙薬を與へ。其時褒美と書物を。引かへにするといふ。手形がはりの文言でごんすの。ヲ、大酒に亂れ若他言せば。我々が身の一大事さ。イヤサ夫が大きな素人根性。そつちをくらせばこつちのばれ口。人殺しのぼくが高い。夫ともに氣遣なら。サアすつぱりとばらさんせと。地尻居に臺座どつさりとすへた性根ぞ　フシ不敵なる。地呑込藥師寺打點き。詞出かした〳〵。其すはつた魂を見込し故。鹽冶が弟縫之助寺岡が首取とらば。我家の秘法を以て。唖ごろも治しくれん。ム、スリヤ兩人をばらした上。兼て聞居る秘法の藥で。ヲ、サ御褒美も遣さるゝ證人は此伴内。地いふをも聞ず。イヤ〳〵〳〵。詞些との間でも唖に成事おりやいやじや。あんだらくさい置しやれと。地呑だと知ぬ納め顔。見るより伴内吹出し。詞ハ、ゝ、何ぼやんちや云た迚跡の祭り。其藥は今呑だ酒に身共が入て置たヤア〳〵そんなら唖に成藥を。ヲ、半時過れば忽ちとまる汝が言舌。叶ぬ事と諦め居れ。ヨウ〳〵〳〵。是は又情ない。コレ藥師寺様。イヤ藥師寺殿。人に臓もまして置て。合點もさせず呑すとは。おれより上越敵役。エ、〳〵といふてもどふも仕様がない。地餘りむごひ胴欲じやはい。地コリヤどうせうと立つ居つ。體をもめばいとゞ猶。五臓にしみこむ秘藥の利目。氣はいふ氣でも出ぬ聲に。ウン〳〵〳〵とうめくより。外に仕様は。泣計足摺したる見苦しさ。地じろりと見遣て。詞ハ、ゝ、ゝハテ妙藥も有物じやな。藥の利目御覽なされ御主人にも無御安心。ヲ、サ〳〵。ナニ源四郎。今いふ如く兩人の内。一人にても討取來らば。即刻得難き妙藥なれ共。藥師寺が威光を以て取寄。以前の通り本復させ召抱へん。コリヤ必吉左右相待をる。イザ驚坂と地打連て。歸るをやらじと源四郎。むしやくしや腹に取付を。エ、面倒なと振ほどき脇坪丁ど藥師寺が。一時殺しの眞の當。呼吸をとめられ倒るゝ隙。間近き人音主從は。見咎られじと足早に。フシ堤傳ひに立歸る。地おのが古郷は伏見の里。藤の森よりいつきせき。夜深に拵ぐ平右衛門。通かゝつて挑灯の。明りに見付る手代の死骸。

詞ヤアコリヤマアむごたらしう殺して有。慥に盗賊いがみの仕事。ハテ強欲な奴があると。地云つゝ通る横顔を。息吹かへし源四郎が。天の興へと後より。思ひがけなく切付るを。引ぱづして早速の寺岡。尻餅つかせば源四郎。起上つてまつかせ矢筈。刀扱取顔見て恟り。詞ヤア不忠者の進藤め體の血は此死骸の。様子一々白状と。地ひしぎ付れば只うん〳〵。薬の利目に唖ごろの。一句も出ぬ荒涙。詞ヒヤアこやつ物の言れぬ仕内。地のぶとい方便とせごされても。是計は嘘でないと。いふも言れぬ目をフシぎろ〳〵。もがく間に懐の。密書落れば取上る。見せじと唖がむしやぶり付。其手をがつくり膝車。乗かつて狀くりひろげ。詞其方殿働をもつて。件の鶏慥に落手致し候。ヤアと驚く寺岡が。地足の綴みに起立源四郎。取にかゝるを張乗し。詞此上鞠、縫之助平右衛門。二人の内密に討取來りなば。約束の妙薬を與へ。過分の恩賞遣すべき者なり。進藤源四郎殿と計頼人は知ね共。詮護の手掛り忝いと。地云ふ間も落たる刀を拾ひ。切込四寸の身を開き。附入早足に叶はじと挑灯ばつたり切落し。逃出す源四郎寺岡は跡をしたふて　三重へ追て行

十　冊　目

地世を忍ぶ。フシ身は深草にあれにし宿の。フシ東窓　地頼む日陰も寺岡が。爰に移らふ藤の森。軒に祝儀の菖蒲ふく今日の。神事と内祝ひ。老の心もまめやかにせわし。内儀の手傳ひは。フシ常に中よきしるしなり。詞申嗅様。鰐も大かた刻みました。鰹は跡でけづります。そふして置て下さりませ。イヤ〳〵。今日は此藤の森のお祭り。殊に孫が誕生目出たい節句。地生先祝ふもあれが可愛さ。手傳はにや成ませぬと。機嫌は願ひのよい出端。フシ一ツと汲で差出し。詞毎日〳〵申上るも氣の毒ながら。又跡月鎌倉より戻られた夫平右衛殿。どふいふ子細か詞さへ。おかけなされぬ他人あしらひ。地お腹の立事有ば。夫はかう是はどふと。いふて機嫌をお直しなされて下さりませと夫思ひ。フシ詫る詞の先折て。詞コレ嫁女。又其事をいやるかいのふ。そなた迚も小身ながら壹畝の家中。間島文太兵衛と云

侍の娘母迚も同じ事。此譯をいふて仕舞ば。一生母は平右衞門に。顏合す事もならぬぞや。聞ぬが花。言ぬが了簡。あいつが事はほつて置て。樂しみは孫の平吉。詞聲がせぬがどこへ往たの。イエハイ今迄表におりましたが。エヽおりましたとはおよそな事。てつきり神事の賑やかなで。宮の方へ行はせぬか。大事の孫に怪我でもさして能物か。アア氣の付ぬと地呵られて。詞夫なら次手にお宮へも。何角の願ひついちよつと。見て參りましよと尻輕に。地行フシ親よりは殘る身が。子に遺はるゝ物案じ。老母は跡をこて〳〵と。フシ取片付て。煙草盆。うさ吹晴す煙より。薄い暮しの我內へ。歸る寺岡平右衞門。フシとつかは急ぎ門の口。詞女房共。お北〳〵坊主めも內に居ぬか。エヽ母者人お一人置て。のら〳〵どこへと。地吃きながら。負た半櫃どつさりと。おろすも直な竹椽へ。押直してかつつくばい。詞今日は端午の御祝儀。お目出たふ存じますと。地云も尻目に見た計。答なければ猶摺寄。詞日外歸つて二夕月餘り。お詞迚もかはされぬは。よく〳〵の義と存ずれど。さし當つて覺なき身。地主人に離れ浪々の。便にも賴にも大事に致すは母お獨り。見放されては天地の內に。住所なき平右衞門。コレ御了簡下されと。眞身の涙諸共に願へど。更に耳へも入ず。詞アヽ嫁や孫は遲い事や。常と違ふて表もざは〳〵。姦やおとましや。地ドレ裏へ出て。氣を晴そふと立上り。フシあいそ納戸へ入影を。地見送り〳〵溜息つぎ。詞やつぱりけふも直らぬ御機嫌。物さへ言ぬ母人の心の怒りは。地どふかなと思ひあたりに氣を配り。先何よりはと半櫃の。蓋引明れば源四郎。ぬつと出るよりきよろ〳〵眼。寺岡を見て摑み付。手を捻上て頭轉倒庭へ投付フシ戸を引立。詞サア何程手向ひ立しても。斯成たらモウ叶はぬ。盜でやつた贋の行衞。眞直に白狀仕やれ。サどうじや〳〵と問詰ても。地うめく計にかぶりふる。詞ヘヽハヽヽハヽしらぬとは言れまい。證據はそちが懷中に持て居た此一通。鹽冶の重寶印子の鷄。受取たと有文體の賴人は知らねども奥の當名は進藤源四郎。御恩を忘れし惡工。言ずば斯と衿じめに。地しめ付られて返答も。泣顏計。ヲン〳〵と。フシ口を敎て伏拜めば。詞サア誤つたらば行先を。早々いへと突放され。地涙に混る水洟を。すゝり上たる指を

筆。詞ナニ〳〵他言せぬ誓言に藥を飲され。啞と成たゐ皆金づく。ヤアスリヤ言舌は廻らぬとな。地ム、と當惑ランランと又書下すを。詞何といふ啞を治す妙藥を。調へ奥なば實の行先白狀せふとは面白いサシテ其藥は。ムウ〳〵スリヤ。忽ち治る妙藥とは。ホイ地と心にさし當る。思案の透間に逃出す。帶際摑て引戻し。詞其妙藥を調へてやろ。再び物を言さぬは證據にならぬ後詰の對決。マア夫迄は手放されぬと。地又もほり込半櫃へ。饌しつかと胸をすへ妻子の歸り松風の音も夫かととつおいつ。思ひ入たる折柄に國幾つ隔る中も。恩愛の緣が。行合下向道。お北が親の文太兵衞。西國武士の堅親父。孫が手を引いそ〳〵と伴ひブシ歸る門の口。詞父樣内は爰じやはいなア。ア、是が。聟の名も替つて有ば。尋ては知にくからうに。よい所で逢たなア。サイナア。明神樣のお引合。コレ平吉御案内しやらぬか。アイ祖父樣。ござれと先に立這入を目早き平右衞門是は扨珍らしい舅殿御用に付てお登か。サ、是へ。コリヤ女房。お足洗がせませぬかい。アイと盥に汲込水の打解し他人交ずのフシ孝行ぶり。詞イヤ〳〵構て下さるな。互の無事は娘に道々言たり聞たり先お袋も息災で孫めが成人モウ八ツに成居るか。アイ丁ど今日が誕生日幟の節句所の祭。地何や彼や取交ての祝ひ日に。よふマア來ては下さんした目出たい中に肝心のコレ此方の人。母樣の御機嫌は直つたかへ何じや娘お袋の氣に違ふたか。ア、イヤ〳〵別でもない内證事。コリヤ坊主よ祖父樣が國からお出と。母者人へ申てこい。アイと立子の年よりも。かしこに響く鐘太鼓音に惚り文太兵衞。詞ヤア〳〵〳〵。アリヤ何事と追取刀。油斷なき武士の心得。ヲ、父樣のけたゝましい。アリヤ祭を仕まふた鳴物じやはいなア。ア、所の神事か。おりや又村に一揆でも發つたかと思ふた。ハ、、、、ホ、、、、。ム、ハ、、、、。地笑ひも機嫌に入口より。地役に當りし鎧武者。何かや〳〵鳴物を。かたげた儘に。詞御亭内にかわけてほしい。ヲ何でも分て貰ふのじや。おれが勝か。おれが負か。元侍の貴丈故鎧武者の捌方。サ、、、、分てもらをと口々に。聲高調子は百姓のこまつた出入としられけり。詞ア、コレやかましい勝の負の分いのとは一ツも合點が行ぬ。エ、惡い呑込。コレ斯じや。中程迄は乘勝た此

どれ作馬から落たは怪我といふ物。コリヤやい下手から落たぼた餅なり。乘拔たはおれが勝じや何吐すぞい。行しなに寄て飲した鬼殺。もくろんで落したな。デモぼた餅が負た證據じや。鬼殺しをなぜ呑した。イヽヤ餅じや。酒じや〳〵酒じや〳〵と地跡や先。どんちやんたゝく鐘太鼓。響き渡りて フシ氣の毒なり。詞アヽ何事かと存したら。コリヤ競馬の爭ひじやな。お互にめでたい御神事御了簡〳〵。中直り酒は拙者が振舞。ソレ地と指圖に女房が。取出す茶碗德利酒。大將權兵衞押とゞめ。詞呑過すから此爭ひ。酒も餅も會所へいて。腹存分にどれ作腹八。モウ了簡をしたが宜はい。いか樣祭に腹を立るは損是から直に會所へいて。酒で敵を討てこます。しかも春から評判の。四十七人の敵討じや。大酒喰の助と見やうがな。イヽヤソレ寺岡とやらいふ足輕めじや。腹切段に逃たとやい。此奴が〳〵。瞎病者は我が中間じや。イヤ腰拔の親類じやと。地知ぬ士民の爭ひも。肝に答ゆる平右衞門。妻も舅も無念泣。吐息繼だる計なり。權兵衞は天窓をかき。詞エヽ機緣のわるい足輕沙汰。出入と一所に山へいけ〳〵。ノウ御亭主。折角出された此お神酒。呑ぬが損じや。一杯づゝ。ついで廻るが地德利酒。殘りはおれがと。がぶ〳〵〳〵。詞サア〳〵〳〵めでたふ一ツ打てくれ。シヤン〳〵。シヤンのしやんと。地中直り。足元迄が鎧武者。エイ〳〵。エイ〳〵わつさり勝興も。しどろもどろの鐘太鼓。囃立てぞ。フシ立歸る。人に詞の禮義さへ投首。したる三人がフシ心々の。屈詫顏。地思案を極め文太兵衞。旅の用意の印籠矢立。紙取添て差出し。詞平右衞門。今日只今他人と成。娘北へ暇の狀。一筆書てもらひたい。コレ父樣。めつそうな何で私に。ヤア構ずともだまつて居れ。サ思案に及ばぬ書た〳〵。ハテかはつたお望。どふ云子細で女房を。ヤアいふな平右衞門。瞎病者と緣組では。此親父迄武士が立ぬ。エヽ我はなア。御主人石堂樣と。鹽冶樣とは近しい御一家。互に似合の足輕同士。娘を呉たは十年以前。所に日外の騷動。足輕寺岡平右衞門も。大星樣の連判に加はり。敵討のお供したと。聞た時の其嬉しさ。傍輩の付合。上役の旁迄。連れな聟を取た。文太兵衞は果報者。手柄者と有難い仰を受。聖の蔭で譽らるゝと。嬉し涙が飜れたはいやい。詞武運に叶ふ

て師直が首取したいと祈る内。敵討も濟だは。春に成て義士の銘々。切腹の人數に寺岡は見へぬ。ソリヤこそな。根が賤しい小身者。逃た〳〵と打てかへ。地爪はじきする譏口。役所へ出るも面目なく。詞何でも逢てと病氣と云立。登つて來てあつけに入たはい。百姓町人に迄。人畜生の樣に云れ。生殘つて頻恥かくを。無念にはないか。口惜ふは思はぬか。ヱヽ見下果た此卑怯者と。老の逸徹齒に絹を着ぬ詞も。荒涙。至極の道理に女房も。どふ取なしも泣じやくり。胸を立切一間より。詞一旦迎へた大事の嫁。戻す事は成ませぬと平吉連て立出る母の親。詞ヲヽお袋。久しぶりの挨拶も。斯成ては他人向。何て娘は戻されぬ。サレバイノ。ならぬと云は此平吉。嫁を力に成人させ。遊武士に育にやならぬ。不肖ながら母に免じて。成ませぬ。其心なら孫めも一所に。此親父が連て逝て。侍に育て見せる。平吉地こい〻と引寄る。手を扱放し平右衞門。詞男の子は男に付。こなたの儘には成ますまい。ムヽ夫なら娘も去らぬのか。アイヤ女房は心任せ。コレ地此通とさら〳〵〳〵フシ書て渡すを文太兵衞。引たくつて三行半。詞去狀地に受取た。サア娘立。ヱヽ立居れとつかふどに云れてわつと聲を上常の氣質で尤と思へど餘り我が强い。武士の意氣地の退去もいとし可愛い我子といふ。血脉の緣に維がれては是が逝る物かいのふ。詞コレ〳〵〳〵平吉。ちやつと祖父樣へ。詫言をして給ひのふ。コレ祖父樣。父上樣。モウ堪忍して母樣と。地一所に置て下されと。父が顏色打守り。泣目をかくす意地らしさ。聞祖父祖母も一時に。ヲヽ可愛やと云事も。ならぬは武家の表向。フシ内に涙をたゝへけり。地氣を取直し文太兵衞。詞ヤア未練な娘。緣切たれば孫とも思はぬ。サアこい地と手を取て。迫立らるゝうさつらさ。詞平吉。母はもふ逝ぞや。惡い蟲が有程に。氣を付て下さんせへ。祖母樣お健であれが事。地頼まするもつど〳〵に言せぬ親の武士氣質。いつ晴間なき。五月雨降は。涙の別れ路を無理に引立出て行。地跡に不便や平吉が。詞父上樣アレ母樣が逝しやつた。わしやどふせうと泣出す。我子を膝に抱きしめ。詞ヲヽよふ堪た。辛抱した。夫でこそ爺が子じや。出かした。〳〵。〳〵と。無量の思ひフシ數々の心の。歎き人しらぬ。地老母は潮立上り。ひらく佛間に

御明しの。光も闇き世を覩じ。詞日外家に歸りしより母が詞はかはさねど。今改めて我子寺岡平右衛門。エイスリヤお詞を下さるふか。ヲヽヲ言ねばならぬ今日の今。アレあの佛間に餝しは。御主人鹽冶判官樣。大星御親子義士の旁。爰に迎へし三ツの位牌。サ近ふ參つて御回向仕や。地ハヽア有難しと敬ひ深く。摺寄我子の衿元摑み。かくし持たる逆朱の位牌。折よ。碎と打杖に。縋る平吉おろ〳〵泣。母も涙の聲震ひ。地ヤイ悴め。今打すへし位牌の逆朱。是を見い。我子の最期を待暮し。忠死寺岡平右衛門と。書た文字も恥しい。世間の譏り人口も。親の欲目に若や又。生延はるには子細でも有ての事かと思ふたが。女房には無理暇取られ舅の惡口一言の。詞も返さぬ今の仕體。武士道は捨つて有ぞよ。詞サア位牌の御前。母が見る前。潔ふ殉死せい。死と進る今迄も。不忠不孝と物言ぬは。憎さ故か可愛さか。母が心を思やれ。武士の鑑と云せたい計じやはやい。是程の事此母に習ふそちではなかつたか。どうした天魔が見入しと。地位牌をはたと打付て。諫る忠孝貞心に只。ハツ〳〵と平右衛門。フシ指伏ひて赤面の樣子表に親と子が。戻つて聞と内にはしらず。詞返答せぬは聞入ぬ心じやな。ハア、是非に及ばぬ。サア平吉。兼々婆が言た通り。用意地〳〵も曇聲。フシ渡す相口受取孫。雪の肌を押脱で。詞コレ祖母樣。わしが死ると。父樣が手柄者にならしやるなら。教て囃ふた此腹を。つい今切て見せますと。地斂き覺期に嬉しさ悲しさ。洩聞外に女房が。何でと叫ぶ口を留。制する祖父も氣はそゞろ。地涙呑込呑込む老母。詞ヲヽ健者じや。よふ言たなア。七ツや八ツの子供でさへ忠と孝とを合點して。潔いアノ形を見い。詞そちが代りに腹切が。助ふとは思はぬか。是でも死ぬか殉死せぬか。サ其義は。サア〳〵〳〵地と。恩愛に。柳かけし義理の繩。しめ付られても。詞此身はどふも。得死ぬか。ヘエヽ地胴欲な身知らず。詞平吉。婆も跡から行。侍の子と譽られてくれヨ。アヽ地合點と突込刄。二目とも見ず寺岡が指添拔取老母を押へ。詞母人暫く。イヤ〳〵放せ〳〵。先づ〳〵〳〵拙者が胸中。躬を見殺す一通り。表にござる舅殿。女房も俱に。こなたへと詞に開く門の口。朱の我子に取付女房。詞可愛や平吉。嗅じやはいのふ〳〵。地ヲヽ祖父も爰にと

縋り寄。意地も立派も今更に泣倒れ。伏計なり。詞嘉様逢たかつたにより来て下さつたのふ。コレ祖父様。父様の代に腹切たら。寺岡は比興じやないぞや。ア、死るのは痛い物じやが。父様の手柄に成と。婆様がいふてじや故。おりやこらへて。極楽とやらへ行ますはいのふ。エ、成ふ事なら大きふ成て。父様を比興者と云たやつを。首切てから行たい。是が腹が立はいのふと。遺あどなきくどき言。是を限りの斷末魔。フシ引取息ぞ。便なけれ。詞ヤレ可愛やと正體も。泣入〳〵祖父と祖母。女房はいつそ氣も飽れ。詞コレ〳〵〳〵〳〵平右衛門殿。どれ程の事が有にもせよ。現在の子が腹切を。よふも見捨て居やしやんしたのふ。地むごひ心と身をもだへ恨歎ば文太兵衛。子細が有ばいへ聞ふ。サどふじや〳〵と母親も。涙と俱にせりかゝれば。詞ハ、ア母の諫舅の意見。御尤とは存ながら。命を惜み生延しは。大星様の御遺言。縋之助様にお家の相續。更合し身の大役。跡目の願ひも寶の紛失。詮議の種は捕へしかど秘藥を以て啞となしたる敵の計略。是を治するは。五月五日に誕生せし男子の生血と聞た時は。南無三寶。廻り逢しは躬が不運。我手にかけふかとや角と。思案に苦しむ其中に。地自身の覺期を幸と。腹切したはお役に立たさ。詞坊主よ。出かした。能く死だなア。地親の名上る計でない。お家を立る大功は。四十餘人の人々にも。劣ぬ忠義の手柄者。詞女房泣な何にほへる泣な。〳〵。地〳〵〳〵と言つゝもまぶた張裂血の涙恨も晴て三人が。心々の悔言。一所に死ふと思へばこそ。祖母が致へて殺しもすれ。跡に殘つて何樂しみ。詞嫁は猶しも悲しかろ。ハイ〳〵〳〵。悦びは悲しみの元とは聞ど情ない。地生た其日が敵にて。殺さにやならぬ因緣なら。出來ぬがまして有た物。誕生日に死ぬるとはどうした報でござんせう。詞ヲ、道理じや娘。尤じや。忠義故とは云ながら。一人も一人健氣な孫。地死する際まで爺親を。比興未練と苦に病だが日本一の大忠臣。詞聞したら嘸悦ばふに。地菩の花を先立て。世を盜で居る此親仁。ヲ、、、、此婆迄が生殘るは。詞こなたも。〳〵。そちも。お前も。地因果同士と一時に打まじへたる溜涙三筋四筋のフシ瀧津浪庭に漲る如くなり。地寺岡はつと泣目を拂ひ。詞此上は悴が忠孝。立るは是と地死骸の

血汐。器に引受以前の　フシ半櫃。　地開けば飛出る源四郎。又逃出すを引戻し。　詞サア約束の妙薬と。　地手に持添て一息に。呑せば忽秘法の利目。うんと悶絶扨こそと。皆の驚き平右衛門引起して。　詞サア白狀。言ずば此儘芋ざしと。白刃を胸に指付られ。　詞アヽコレ〳〵まだ物は言れぬ〳〵。早まるまいと云言舌。　地自由に成たは天の助け。きりきり吐せと捻付られ。體も倶に横手を打。　詞コリヤ奇妙。藥も有ば有様に。言て仕舞ば言分あるまい。貶人は佐平太殿。實は則藥師寺が。京の屋敷に持て居らるゝ。スリヤ推量に違ひなく。縫之助様此寺岡。二人の内を討て來いと。言ふたも彼奴が工じやな。成程〳〵其通り。密書を割符に褒美の金。受取手筈も皆すかたん。モウ此上はお助けと。　地油斷を見すまし捨たる刀。取手も早く切付るを。換す早足の平右衛門。刀蹴落し呼吸を一あて。倒るゝ　フシ源四郎　詞コレ　聟殿。詮議の種を失ふては。アイヤ氣遣ひあるな舅殿。暫時に戻る半時殺し。仕上は斯と半櫃へ。打込思案の締括り。　詞こいつを此儘詮議の證人。是より直に藥師寺が。館で躬が敵も一所に。ホヽヽヽ。遁　聟殿上分別。孫が忠義も立一件。隨分首尾よふ。お早ふと。　地隱し涙の母女房。坊主が亡體宜しくと。一聲殘す時鳥。わつと血を吐三人が。泣音をよそに別れ道。世のうき伏見の隱れ里歎きを跡に　三重へ急ぎ行

十一冊目

地西八條の在番所には。藥師寺次郎左衛門預る役義の表向。邪氣を隱せし幕目も。夫と白洲に奴らさが。　フシ打水ばかり都なり。其水よりは水際の。立た取形細そりすふはり。端手な姿の二人連。　詞是は專ら吾妻にて。四十餘人の敵討。賣て歩行は紙代計。當世流行忠臣藏。見立盡しを買しやんせ。　地お買なされと　フシ賣聲を。　地聞て立寄る奴共。　詞何だこりや珍らしい。敵討の見立より。女子の賣人が新しいなア。イヤサ聞事で有べいなれ共。是の旦那は彼今の。敵討には差合たら〳〵。聞て濟ない早く行〳〵。ヲヽ何じやいな町方よりは武家方で猶買しやんす見立づくし。

ソレ〳〵買てさへ下さんしよは。二人が踊を添るがなと。恥しそふに言事も夫者の手管に奴共。現抜してぐんにやぐんにや。詞見れば見る程美しい其顔で歌を諷つたら。びやくらいたまらぬ物で有べい。ヤア〳〵譬主人が御目玉で。お暇が出ても大事ない。所望〳〵と地口々に。望懸れば今更に。恥しいのも何の其。いつそ儘よと目交して。師直が〳〵。かほよ見初て賄賂取て。果は鹽冶の家潰し。四十餘人が年比の怨。高の館へ押寄る。忠臣孝心。遵義心。終に殉死も善惡の沙汰。見立盡しを買しやんせ。詞ヤイ〳〵〳〵姦い參り掛つて聞とも知らず。鹽冶鼎鼎の踊歌。此館で云觸すはア、聞へた扨はうぬらは大星抔が由緣よな。ヱ、憎い奴と。驚坂が。目に角を。立端のないは奴共。詞夫見らふ。是じやに依て身共等が。歸れと云を聞入ぬ。はつさい共。早立〳〵と地言捨に。已から先へ逃て入おづ〳〵二人も立出るを。詞コリヤ〳〵〳〵待居らふ。いかにしても詮議有奴。其持て居る見立とやら身共が前で讀上い。イイエハイ夫はどうぞお赦下されませ。イヤのぶとい奴の。讀ぬは曲者引括つて。何にも角も白狀させふか。サアそれは。サア〳〵〳〵早く讀。ハイ此上は是非に及ばぬ。お橘樣讀しやんせ。サア私も讀けれど。マアお妻樣お前から。そんなら私と地押開き。詞マア此度の敵討。敵味方も澤山有内。第一の大關は。聞迄もない大星由良之助て有ふがな。イヤ私等が賣まする大關は。驚坂伴内樣とやらでござんすはいなア。ヤア何じや。驚坂伴内。そりや又どして大關じや。サア其處にこそ謂因緣。よふ思ふて御覽じませ。時の拍子で師直樣が。鹽冶殿に切れて死なしやんした其時は相手代つて敵討は伴内樣。イカニモそふだ。由良之助は比與者。一人の敵に四十餘人。徒黨して討のが何の手柄でござんしよ。いかにもそふだ。伴内樣なら一人して。四十餘人が百人でも討しやんすは知た事。夫で今度の大關は驚坂樣でござんすはいな。いかにもそふだ。イヤハヤ〳〵奇々妙々たる評判な。夫で疑ひさらりと晴た。出かした〳〵〳〵と地打て替たる滿悅顔。サア仕て遣たと二人は摺寄。詞是程名高い伴内樣。どんな殿御じやお顔なと。見度が望て此讀賣。必笑ふておくれなへと。おかしさ隱して嬲掛れば。ヲ、安い事〳〵。遠からん者は音にも聞。近から

んは。寄て此鼻が。恥かしながら伴内ぞや。去ながら今其方達が言如く。振替つて師直殿。御切腹なされなば。敵を討て此伴内。名を萬天に上んず物。地館く武運に盡果しと。思へば悲しい〳〵と無念の涙はら〳〵と出そふな所を得出さぬは家相應の忠臣なり。折から小者が聲として。詞石堂様の御入と。聞たか女共まだ咄したい事も有ど。堅そう殿の御入。コリヤ臺所へいて待て居れ。コリヤ必逝なよ。合點かといやな目付の女子好。アイ〳〵〳〵と。二人は目まぜ首尾よしと勝手口へと急行。早評定の刻限と入來る石堂右馬頭。道太守の其骨柄。徐々座席へフシ通らるれば。次郎左衞門出迎。詞是は〳〵石堂殿。今朝も又鎌倉より飛脚到來。雌雄の鷄相知れなば。大切なる御造營。急がせよと重なる嚴命。いかゞ成さるゝ御所存と。地盜ませ置し寶の詮議。空恍けしてフシ尋る侯奸。地右馬頭につこと笑ひ。詞寶を失ふ越度により。淀屋の家も遁ぬ罪科。併捨置れぬ寶の詮議。奪取たる盜賊も慥に夫と石堂が。睨だ眼は違はじと。地見透す詞に底氣味も。さあらぬ挨拶紛す折柄。詞申上ます。鹽冶判官が浪人と申。藥師寺様へ御直談と押て是へ通りまする。ヤア素浪人の分際で藥師寺様へ對面とは。身の程知らぬ慮外者。早追取せと驚坂が。地いらつて下知する間もなく。支る雜人刎退蹴退。脊負半櫃しつかりと腰をすへたる足輕フシ寺岡。ヤイがらくためら。藥師寺殿に逢までは。跡へは歸らぬ平右衞門。留立して怪我まくるなと。地白洲にどつかと押直る。詞ヤア過言なる狼藉者。地夫引立よと伴内が。下知に取付下部共。摑でほぶる强力强勢。ヤア手向ひひろがば身共がと立寄驚坂。ヤレ待伴内控へておれ。ムウ誰ぞと思へば。扶持放されの足輕めじやな。藥師寺に直談とは。ア聞へた素浪人の喰ひ物がなさに無心に來たか。ハレ不便なやつなア。ヤアとぼけまい藥師寺殿。サア四も五も入ぬそなたが盜だ。鹽冶の重寶。雌雄のかたし。雄鳥を爰へ出さつしやれ。だまり居ふ。此藥師寺を盜賊とは。出る儘のたは言。石堂殿も是にお渡り。今一言ぬかして見おらふ。ヘエハヽヽヽ御家門のお殿様も是にお渡りなさるゝからは。猶明白に糺して見せう。イヤナニ平右衞門。藥師寺殿を盜賊とは。身の程知ぬ非禮の過言。夫共に證據ばし有ての事か。何と〳〵。ハア

證據と申は不忠者の進藤源四郎引捕へて何かの白狀。イヤサ證據抔とは皆僞り。源四郎は子細有て。啞ころと成たる由。伴內に聞て居る。但し啞めが物を言たか。ぬけ〳〵としたア頰はい。ム、ハ、、、、ヲ啞と成た源四郎に今物を言して見せふ。是見て置と半櫃を。地明て引出す源四郎。詞サア今一度此所で頼れた工の一々。白狀ひろげと捻付れば。アイタ〳〵〳〵そふ手强ふては物が言れぬ。少と緩めて下されと。地廻る言舌。詞コリヤどふじやと地けてんの藥師寺。伴內も色をフシ違へて閉口す。詞そふ有ば赦してこます。斷然言せと突放せば。地些つと逃退。詞何じやい〳〵。おりや何にも知らぬぞよ。いかに弱い者じや迚。手込にして知ぬ事を。白狀せいとは後ぐらひ。知ぬ事はいつまでも知らぬ〳〵と。地横につゝばるもがり性根。落付藥師寺引取驚坂。詞サア寺岡。證據はどふだ。僞りと仰しやつたは。藥師寺樣の誤りで有まいかな。エ、人畜生の源四郎。譬白狀せぬにもせよ。外に證據は此一通。名當は無けれど自筆の書面。書人は慥に藥師寺。コリヤ〳〵〳〵平右衞門。そりや證據には成まい〳〵。石堂樣。自筆で書た此狀。なぜ證據には成ませぬな。サレバサ名當がなければ反古も同前。有論なる義を言募。若も寶に凶事有ては。イヤサ。寶の有所知る迄は。身を慎むが義心の肝要。慮外の段は誤れ〳〵。藥師寺殿にも御了簡。短慮なるは下郎の癖。イヤ打やつて何かの密談。藥師寺殿。いかにも。赦されぬやつなれど。石堂殿の御挨拶。イヤナニ伴內。見苦しい源四郎め。奥庭へ打込置。イサ石堂殿。先奥へ御入有れませう。五月雨に降しく池の水增して。樣子窺ふ二人の女そつと忍んで庭に出平右衞門樣。お前の敎に入込て。始終の樣子は聞ましたが。寶とやらが手に入ねば大事の〳〵縫之助樣。いとしと思ふ辰五郎樣。お二人のお家も立ず。こりやどふしたらよからふぞいなア。浮橋樣。吾妻殿。何にも氣遣ふ事はない。もふ此上は破被。石堂樣のお詞は重けれど。手延にならぬ寶の詮議。奥へ踏込藥師寺め。首筋押へて受取寶。お前方は不忠者の源四郎め。欺し寄てコレ斯ナナ。アイ〳〵命にかへても二人して。仕課せませう。出來た早ふ。合點でござんす。足輕め待居らふ。コリヤ粕奴め何で邪魔する。ヲ、そりや身共が言付た。ヤアそちや師

直が躬佐平太。此屋敷にはどふして居る。ヲヽ藥師寺殿と言合せ。密に登つた其子細は親師直を討たる敵。四十餘人は自滅ひろぐ。迫て殘つた平右衞門。首打落すが父への孝養。覺悟して夫へ直れ。御意じや直れ〳〵〳〵。ハヽヽヽ討洩した高の佐平太。出くはしたは此方の幸。念佛でもこづき出せ。ヤアいらざる廣言。ソレ者共。地心得組付四人を相人。手練の寺岡事ともせず。受身の待遇取手の秘術。暫し揉合　三眞間もなく。いらつて切込佐平太が。刀をかはして飛鳥の入身。又打かくるを受たる庭石。ハテ心得ぬ。佐平太が懷中にて。鳴たは慥に金の鷄。盜隱せし寶の有所。ヤア此啼聲を寶とは。ホヽヲ鹽冶家淀屋に傳る名器唐の玄宗皇帝。御秘藏有し金の鷄。久しく雌雄別れし時。たま〳〵逢合奇瑞には。音を出すと有ふしぎを聞。詮議の種に預りし。淀屋の雌鳥。今啼音に知らせし寶。こつちへ渡せ。ヲヽ斯顯れたら渡して吳る。代りには已が首と。地又打懸る刀を押へ。突込腕に引出す鷄。そふはさせぬと伴内が。一寸摑で逃出す。とゞむる。さゝゆる入亂れ。爭ふ内に伴内が。屋根へ投遣る件の寶。南無三寶と平右衞門。屋根を目掛て駈登るを。數多の家來が取卷を。ばらり〳〵と薙倒し。何れ隙なく爭ひける。此方の間には浮橋吾妻。源四郎相手に詰寄〳〵。詞不忠の天罰源四郎。我々が手に掛るぞ。ヤア一寸才な幻妻めら。なぶり殺しと段平物。氣は勇ども女業。かよはき受太刀たぢ〳〵〳〵。既に危ふき一間より。飛來る手裏劍。源四郎が。究所に當つてフシ倒るゝ有樣。一間を出る右馬頭。詞天より當る小柄の手裏劍平右衞門が忠義にて追付揃ふ雌雄の寶。鎌倉殿へ差上なば。其功により縫之助が。科を赦し我國へ分地させよと。赦免の御上意。又師直積惡も。一々御聞に達せし上は。佐平太初藥師寺迄。やまて遁れぬ天の責。二人の貞女を家土產に。源四郎が首討て。夫夫へ早ふ〳〵。ぱつと二人は有難涙。餘る憎さに進藤が。首搔切て躁々と。詞そんなら殿樣早お暇。いそげと一聲賢者の詞。引別れてぞフシ棟高き。見るも危き家根の上。難なく寶奪返し。おり立寺岡支ゆる大勢。突込長柄を切拂ふ。手練の太刀風强氣の切先。切立られて叶はじと。逃出し大勢追行寺岡。詞ヤレ待暫しと聲を掛地物見の亭より右馬頭。詞ホヽウ出かした寺岡。汝

が忠義の働故二品の寶手に入る上は。鹽冶の再興近きに有と。地悦ぶ後に藥師寺鴛坂。そふはさゝぬと上と下。二人へかゝるを取て押へ。閑敵の餘黨惡事の同類鎌倉へ。地引立て御裁許受んと石堂が。智勇の詞納りし。御代の賑ひ門門に。飾立たる染職。御鼎眞御祝儀進物も大入國入取まぜて目出度筆を納めける。

寛政九年丁巳如月廿一日

作者　若竹笛躬
　　中村魚眼
　　並木千柳

忠義墳盟約大石　終